京都市内遺跡試掘調査概報

平成10年度

京 都 市 文 化 市 民 局

ごあいさつ

京都は，世界に誇る数多くの歴史遺産に恵まれた大都市であります。市内の埋蔵文化財包蔵地には，年代ごとに幾層にもわたり積み重ねられ，歴史の重みをもつ遺跡が数多く存在致します。

このような埋蔵文化財は，我が国の歴史や文化の成り立ちを知ることができる国民共有の貴重な財産であり，将来にわたって保存すべきものであります。

近年，埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等による開発行為は，これら埋蔵文化財保護に少なからず影響を及ぼしており，先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私達は，その保存と開発との調整を適切に行い，これを後世に伝承していく責務があると考えております。

本報告書は，平成10年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の結果をまとめた概要報告書であります。調査のうち，試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し，発掘調査及び立会調査は，財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託し実施したものであります。

結びに，今年度の各調査の実施に当たりまして，御理解と御協力を賜りました市民の皆様をはじめ，御指導と御助言を賜りました関係機関の皆様に深く感謝申し上げますとともに，本報告書が京都の歴史を知るための一助として，お役に立てていただければ幸いに存じます。

平成11年３月

京都市文化市民局長

坪　倉　　譲

例　　言

1　本書は，京都市が文化庁国庫補助を得て実施した平成10年度の京都市内遺跡試掘調査概要報告書である。

なお，本書は平成10年１月から12月まで実施した試掘調査の概要を報告している。

2　試掘調査を実施した総ての地区・所在地・調査日・調査概要については，試掘調査一覧表に掲載（31～34頁）している。

3　本文の執筆分担は，本文の末尾に記している。

4　本書に使用した地図は，本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。

図版1～13　1/8,000　　図版14～19　1/10,000

5　本書に使用した土壌色名は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。

6　遺物整理にあたっては，丸山裕見子・鵜飼隆司・塩崎美保の協力を得た。

7　本書作成，調査実施にあたっては，京都市埋蔵文化財調査センターが担当し，次の機関の協力を得た。

京都市文化市民局文化部文化財保護課・（財）京都市埋蔵文化財研究所

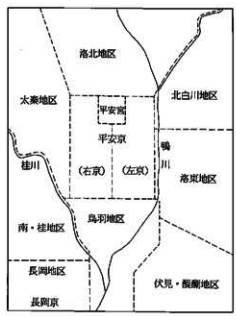


図１　調査地区割図

目　次

頁

Ⅰ　試掘調査の概要 ……1
1　調査の概要 ……1
2　各地区の調査概要 ……1

Ⅱ　平安宮豊楽院東華堂跡 ……4
1　調査経過 ……4
2　遺　構 ……4
3　遺　物 ……5
4　まとめ ……10

Ⅲ　平安京左京五条三坊三町跡 …11
1　調査経過 ……11
2　遺　構 ……11
3　遺　物 ……12
4　まとめ ……14

Ⅳ　嵯峨七ツ塚4号墳 ……15
1　調査経過 ……15
2　調査の概要 ……17
3　まとめ ……18

頁

Ⅴ　名勝平安神宮神苑 ……19
1　調査経過 ……19
2　遺構・遺物 ……20
3　まとめ ……21

Ⅵ　白河街区跡 ……22
1　調査経過 ……22
2　遺　構 ……22
3　遺　物 ……23
4　まとめ ……25

Ⅶ　史跡青蓮院旧仮御所 ……26
1　調査経過 ……26
2　遺　構 ……26
3　遺　物 ……27
4　まとめ ……28

Ⅷ　下鳥羽遺跡 ……29
1　調査経過 ……29
2　遺構・遺物 ……29
3　まとめ ……30

報告書抄録 ……35

図 版 目 次

図版1　平安宮
図版2　左京北辺・一・二・三条　一・二坊
図版3　左京北辺・一・二・三条　三・四坊
図版4　左京　四・五・六条　一・二坊
図版5　左京　四・五・六条　三・四坊
図版6　左京　七・八・九条　一・二坊
図版7　左京　七・八・九条　三・四坊
図版8　右京北辺・一・二・三条　三・四坊
図版9　右京北辺　一・二・三条　一・二坊
図版10　右京　四・五・六条　三・四坊
図版11　右京　四・五・六条　一・二坊
図版12　右京　七・八・九条　三・四坊
図版13　右京　七・八・九条　一・二坊
図版14　植物園北遺跡・中臣遺跡・山科本願寺跡
図版15　白河街区跡・史跡青蓮院旧仮御所・法性寺跡・史跡延暦寺境内・
おうせんどう廃寺跡
図版16　六波羅政庁跡・禅林寺旧境内・嵯峨七ツ塚古墳群・西野町遺跡・和泉式部町遺跡・
史跡特別名勝天龍寺
図版17　伏見城跡・北野廃寺跡・上ノ段町遺跡・上久世遺跡・中久世遺跡
図版18　鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡
図版19　長岡京跡

挿 図 目 次

頁

図1　調査地区割図……例言
図2　調査位置図……4
図3　トレンチ位置図……4
図4　1トレンチ土壙1部分東壁土層図…5
図5　東華堂跡出土遺瓦拓影及び実測図1……7
図6　東華堂跡出土遺瓦拓影及び実測図2……8
図7　鴟尾実測図とその位置……9
図8　調査位置図……11
図9　トレンチ位置図……11
図10　1トレンチ土壙1部分北壁土層図…13
図11　1トレンチ出土土器実測図……13
図12　調査位置図……15
図13　トレンチ位置図……16
図14　3トレンチ東壁土層図……17
図15　出土土器実測図……18
図16　調査位置図……19
図17　トレンチ位置図……20
図18　1トレンチ北端西壁土層図……20
図19　出土遺物実測図……21
図20　調査位置図……22
図21　トレンチ位置図……22
図22　4トレンチ北壁土層図……23
図23　4トレンチ炭層出土土器実測図……24
図24　青蓮院境内内調査位置図……26
図25　トレンチ配置図……27
図26　SX27出土土器実測図……28
図27　調査位置図……29
図28　トレンチ中央東壁土層柱状図…29
図29　トレンチ位置図……30

表 目 次

頁

表1　年次別試掘調査実施件数表……1
表2　試掘調査一覧表……31～34

写 真 目 次

頁

写真１　拡張区完掘状況（南東から）……5
写真２　東華堂跡出土緑釉軒丸瓦 ……6
写真３　東華堂跡出土緑釉軒平瓦 ……6
写真４　土壙１北壁断面（南東から）……12
写真５　２トレンチ完掘状況（東から）……12
写真６　調査地遠景（南から）……15
写真７　１トレンチ全景（北から）……17
写真８　３トレンチ全景（北から）……18
写真９　１トレンチ全景（北から）……21
写真10　４トレンチ全景（南東から）……23
写真11　４トレンチ炭層出土鋳型片 ……24
写真12　法箇印塔取り上げ状況写真 ……28
写真13　トレンチ全景（北から）……30

Ⅰ　試掘調査の概要

1　調査の概要

この概要報告書は，京都市埋蔵文化財調査センターが平成10年１月から３月末までの平成９年度と平成10年４月から12月末までの平成10年度に実施した，試掘調査の結果をまとめたものである。この１年間に実施した試掘調査は，埋蔵文化財包蔵地内で80件，史跡・名勝指定地内で４件の合わせて84件あり，前年に比べて７件減っている。バブル経済の崩壊以後，調査件数は表１のとおり一時的に減少するが平成６年には一旦100件と増加に転じた。しかし経済活動の低迷から翌年には調査件数も減少し，以後現在まで年間80～90件で推移している。本年の開発工事の傾向としては，マンション建設や宅地開発などの住宅建設が多数を占めること，また老人ホームなどの福祉関連施設の建設が目立った。

2　各地区の調査概要（31～34頁　試掘調査一覧表・図版1～19参照）

平安宮地区　平安宮跡内での調査は朝堂院１・豊楽院２・大蔵省２・太政官１・兵部省１・刑部省１・左兵衛府１・西雅院１・内教坊１・宴松原１の合計12件を実施した。

聚楽廻中町の豊楽院東華堂推定地の調査では，土壙内から多量の平安時代前・中期の瓦が出土した。その中には緑釉軒瓦も多数含まれており，本書で概要を報告する。また西ノ京内畑町の調査では，土壙群を検出したことから発掘調査を指導し，調査の原因が京都外国語大学の国際交流

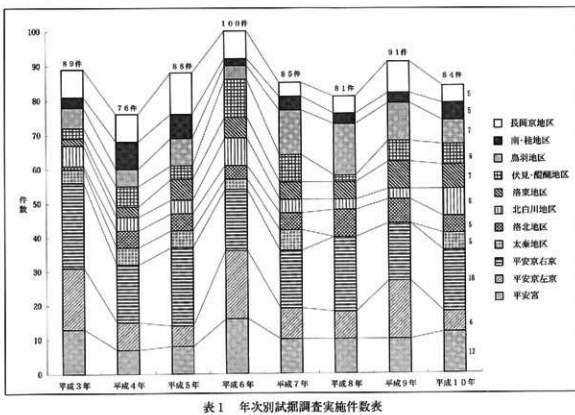


表１　年次別試掘調査実施件数表

センター建設であったため同大学が発掘調査を実施した。その他の調査では近世の土取り跡などによる地山の削平が著しく，あまり顕著な遺構は発見出来なかった。

また，上京区御前通一条下る東堅町にある京都市立仁和小学校内では財団法人京都市埋蔵文化財研究所が校舎建替に伴って原因者負担による試掘調査を実施した。調査場所は正親司と漆室の境界に位置しており，桃山時代の東西溝を確認したことから発掘調査に切り替えた。

平安京左京地区　この地区では昨年17件の調査を数えたが，本年は減少し6件を調査した。この内，下京区猪熊通五条上る柿本町（六条二坊二町）の調査では，地表下60cmで中世の土壙墓群を検出したため発掘調査を指導，調査は財団法人古代學協會が担当した。また，中京区烏丸通綾小路西入童侍町（五条三坊九町）の現場では，中世遺構の残存状況が良好であったことと，計画建物が仮店舗であったことから，遺構保存のため設計変更を指導した。

下京区新町通高辻上る岩戸山町（五条三坊三町）の試掘調査では，敷地の北端で平安時代末の土壙を検出し，多くの土器類が出土したことから，その概要を本書で報告している。

六条一坊二町内に位置する下京区中童寺坊城町の光徳小学校内では，校舎の建替工事に伴って財団法人京都市埋蔵文化財研究所が試掘調査を実施した。この調査では近世の広範囲にわたる粘土採掘による攪乱が著しかったことにより，顕著な遺構を検出することが出来ず，試掘調査段階で終了した。

平安京右京地区　この地区では昨年とあまり変わらない18件の調査を実施した。ＪＲ二条駅前の中京区西ノ京梅尾町他（三条一坊二町）の調査では，推定朱雀大路西側溝を検出したことから，発掘調査を指導し，調査は吉川義彦が担当した。

また，下京区西七条八幡町（七条三坊二町）での老人ホーム建設計画に先立って財団法人京都市埋蔵文化財研究所が試掘調査を実施した。この調査では顕著な遺構はなく湿地状堆積を認めただけであったことから発掘調査は指導していない。

太秦地区　和泉式部町遺跡・上ノ段町遺跡・西野町遺跡・嵯峨七ツ塚古墳群・史跡・特別名勝天龍寺庭園で各1件の調査を行った。この内の史跡・特別名勝天龍寺庭園の調査は，文化財保護課と共同で行ったものである。

右京区北嵯峨野にある嵯峨七ツ塚4号墳の調査では，当初の墳丘端部と推定される段差を認めたので本書で報告する。また，この現場では平安時代の遺物が出土したことから，工事着工時に伴う立会調査を指導した。

右京区太秦森ケ西町の和泉式部町遺跡の現場は，昭和62年に発掘を行い弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡を多数検出した場所の西隣りに当たり，掘立柱建物の柱穴や落ち込み状の遺構などを検出した。ここでの開発計画は木造住宅建設に伴う造成工事（主として埋設工事）であったことから埋設管位置などの設計変更を指導した。

洛北地区　この地区では北野廃寺で3件，深泥池瓦窯跡・植物園北遺跡でそれぞれ1件，合計5件の調査を実施したが，いずれも明確な遺構を検出出来ず，発掘調査には至っていない。

北野廃寺の南限に当たる北区北野下白梅町の調査では，50m東で推定一条大路北側溝を検出し

ているにもかかわらず，近世以降の池もしくは湿地状の遺構を発見しただけで側溝の続きを確認することは出来なかった。

北区小山上総町にある大谷大学は，昭和60年に実施した構内の発掘調査によって奈良時代の竪穴住居跡や流路跡を発見したことを契機に「上総町遺跡」として周知されるようになった。今回，同大学が体育館建設を計画したことから学内に大谷大学構内遺跡調査会を設置し，同調査会が試掘調査を実施した。その結果，耕作土の下に土師器や須恵器などを含む整地層を確認したものの，その下層は河川等の氾濫域を示す砂礫のみで顕著な遺構を検出できず，補足的にトレンチの拡張を行ったのち調査を終了した。

北白川地区　この地区では史跡延暦寺境内と禅林寺旧境内で各１件のほかに六勝寺を含む白河街区跡で６件の調査を実施した。白河街区跡の南西端に近く現在「寺町」を形成している左京区仁王門通新高倉東入正往寺町の寺院境内での調査では，工房跡を推測させる鋳型等が多量に出土したことから，計画建物の設計変更を指導し，その概略を本書で報告する。また名勝平安神宮神苑内では平安時代末の東西溝を検出したため本書で報告する。

洛東地区　この地区では法性寺跡と中臣遺跡で各２件，ほかに史跡青蓮院旧仮御所・六波羅政庁跡・山科本願寺跡で１件づつ調査を実施したが，いずれも発掘調査には至らなかった。この内，史跡青蓮院旧仮御所の調査は，文化財保護課との共同調査であり，江戸時代前期の土器類がまとまって出土したので本書で紹介している。

伏見・醍醐地区　この地区ではおうせんどう廃寺跡１件，伏見城跡５件を調査したが，いずれも発掘調査に至るような遺構・遺物は検出できなかった。伏見城跡に関連した調査では，京都市都市計画局が伏見から六地蔵へ至る上板橋通の道路拡幅工事を計画し，財団法人京都市埋蔵文化財研究所が事前に試掘調査を行った。その結果，現況の道路に平行して石垣列と石組溝が約200ｍにわたって良好に残存し，これらが山内土佐守や松平伊豆守の屋敷地を区画する遺構に推定されることから発掘調査を指導した。

鳥羽地区　ここでは，鳥羽離宮跡４件，下鳥羽遺跡３件の調査を実施した。発掘調査を指導した現場は無いが，掘立柱建物を検出した伏見区竹田松林町の調査地（本文29頁）と弥生時代？の溝を多数検出した伏見区下鳥羽西芹川町の調査地は設計変更を指導した。

南・桂地区　この地区では上久世遺跡・中久世遺跡各２件，大藪遺跡１件の調査を行い，部分的に遺構や遺物を確認した場所もあったが，全体的に遺構の残りも悪く，いずれも発掘調査を指導するには至らなかった。

長岡地区　長岡京跡内を５箇所試掘調査したが，ここでも遺構を一部で確認した場所もあったが，全体的に遺構の残存状況が悪く，試掘調査段階で終了している。

（長谷川行孝）

Ⅱ　平安宮豊楽院東華堂跡　No.2

1　調査経過

調査地は，中京区聚楽廻中町40-7の一部，40-17の一部で，推定では豊楽院東華堂跡の東限ラインが敷地の西端部に通ると予想されている。

豊楽院は「天子宴会之処」とされ，東華堂はその正殿である豊楽殿の北東方向にあり，最勝王経斎会，弁官行事所の雑物を収めていたとされる[1]。また，この堂は清暑堂の東，栖霞楼の北に位置しており，清暑堂の西にある西華堂と相対する[2]。

今回，当該地にマンションの建設が計画されたため，東華堂基壇や雨落溝等の痕跡を確認する目的で，試掘調査を平成10年３月９日・10日に行った。

調査の結果，敷地中央部で平安時代の瓦廃棄土壙を３箇所で検出した。しかし，東華堂推定ライン付近を中心に，敷地の大部分は壁土採取と見られる土取りの影響で撹乱されていた。

図２　調査位置図（1：5,000）

2　遺　構

計画建物範囲内に幅1.0m，長さ15.5mの１トレンチを設定した。このトレンチの南半部で瓦廃棄土壙を検出したため，西側に拡張した。この拡張区の面積は，35.9㎡になる。

また，東華堂跡の痕跡を探るために，幅0.8m，長さ8.6mの２トレンチを設定した。

層序　厚さ約50cmの表土を取り除くと，黄色泥砂の埋土をもつ撹乱の掘形が認められる。撹乱の影響を受けていない部分では褐色砂泥の整地土が厚さ20cm程度残存している。この下層に地山の明黄褐色砂泥（いわゆる聚楽土）があるが，この層を

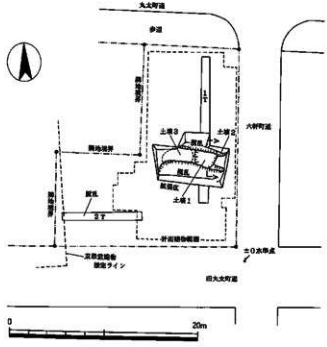


図３　トレンチ位置図（1：400）

穿って平安時代の瓦を廃棄した土壙が築かれている。近世の土取りは緊密土を掘り下げて砂礫層にまで達している。

土壙1　東西2.2m，深さ55cmを測る。土壙の南肩及び北肩は撹乱により破壊されているが，長さ1.6m程度残存している。この土壙の掘り込み断面はオーバーハングしており，壁土採取を目的に掘られた後，周辺にあった瓦を整地用に廃棄したと考えられる。土壙内で採集された遺物には中世以後のものは含まれていない。

土壙2　土壙1を切っているため，若干土壙1よりも新しいと考えられる。南肩及び西肩の一部を除き大部分が近世以後の土取りにより破壊されていた。深さは73cmである。軒先瓦の多くがこの土壙から出土している。

土壙3　東西3m，南北1.5m以上の擂り鉢状の掘形をもっている。深さは50cmである。土壙内から緑釉軒平瓦をはじめとして，多くの瓦片を採取した。

写真1　拡張区完掘状況（南東から）

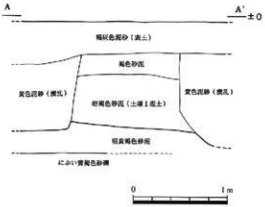


図4　1トレンチ土壙1部分東壁土層図（1：40）

3　遺　物

調査場所は，豊楽院東華堂跡推定地に近接するため，大半の出土遺物は豊楽院に関係するものである。その他，表土近くからは近世陶磁器片なども若干出土した。

今回の試掘調査では，瓦の廃棄土壙が三箇所検出され，その部分を拡張して遺物の取り上げを行ったが，出土遺物からは三箇所の土壙に大きな時代差は認められない。

そのほか瓦溜めからは若干の土器（土師器片）も出土しており，取り上げた遺物（大半が遺瓦）は全部でコンテナ6箱余りある。

出土した遺瓦類は豊楽院跡らしく，宮殿建築に使用された鴟尾・磚瓦・緑釉瓦（軒先瓦・堤瓦・丸瓦）などを含み，ほかに無釉の軒先瓦・丸瓦・平瓦などがある。

鐙瓦（図5参照）

1・2は同一の複弁八葉蓮華文鐙瓦の破片とみられ，弁間文は線で表す撥形を呈し，平安宮のほか西寺などからも出土しており，西賀茂瓦窯の製品とみられる。3は複弁八葉蓮華文鐙瓦で西賀茂の製品とみられる。4・5は文様が複弁とは分かるが，かなり残りが悪い。西賀茂で焼成された製品と思われる。6は瓦当面をほぼ残す緑釉単弁八葉蓮華文鐙瓦で，洛北の岩倉幡枝にある

栗栖野瓦屋で焼成された製品である。大極殿や豊楽殿など国家の主要建物の屋根を飾った緑釉瓦であり，図6の宇瓦7と対になる。接合式で瓦当面上部の丸瓦接合部分から後ろがはずれ，周縁と外区の上部を欠損している。緑釉は文様面全体に緑色が抜けて鮮やかさを欠くが，周縁と花弁の一部に元の鮮やかな緑色を残している。胎土は施釉発色を考慮して良質な薄黄橙色の土を使用しており，焼成も良好で成形は極めて丁寧である。7は文様が不鮮明で，中房に1＋6の蓮子を配する複弁蓮華文の接合式鐙瓦である。8は複弁六葉蓮華文鐙瓦とみられ，周縁部はなく，瓦当中房に長径1.2cmの小石が突き出しており，作りも粗雑な瓦で，森ケ東瓦窯の製品とみられる。

写真2　東華堂跡出土緑釉軒丸瓦（撮影　村井伸也）

写真3　東華堂跡出土緑釉軒平瓦（撮影　村井伸也）

宇瓦（図6参照）

1は所謂「長岡宮型式」の意匠をもつ唐草文で，中心側文は大小の蕨手を向かい合わせに配置する。太政官跡（1978年調査）や右京北辺二坊跡（1987年調査）の発掘調査でも出土している。2は対向C字形唐草文の右端の破片とみられ，摂津岸部瓦窯の製品と思われる。3は対向C字形左右三転式宇瓦の中心部分の破片で，極めて良質な灰白色の土を使用している。表面には暗灰褐色のハケで塗ったような筋目状の痕跡が認められることから，緑釉瓦であったものが火災などで変質した可能性も棄てきれない。西賀茂瓦窯の製品である。4は対向C字形左右三転半式宇瓦で，西賀茂の製品である。5は中心部分の破片で，西賀茂瓦窯の製品にこれと近いものがある。6は唐草を単線と複線を組み合わせて図案化した独特の左右三転式宇瓦で，小野瓦屋の製品とみられ

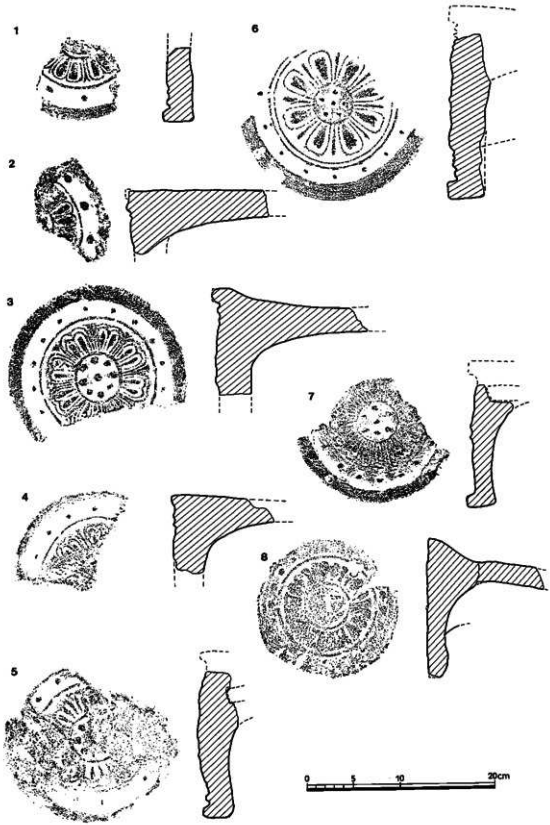


図5　東華堂跡出土瓦拓影及び実測図1（1：4）

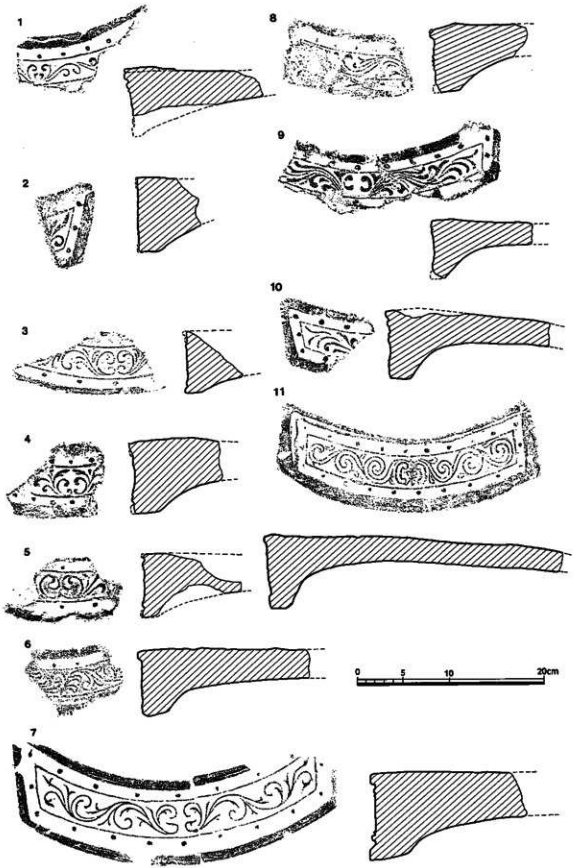


図6　東摩堂跡出土遺瓦拓影及び実測図2（1：4）

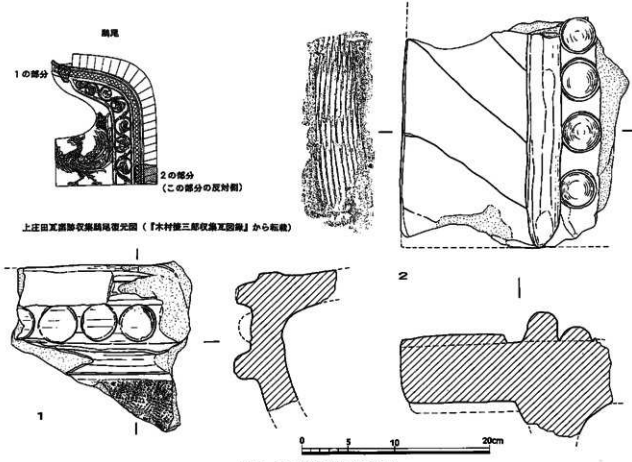


図7　鴟尾実測図とその位置

る。7は緑釉が極めて明瞭に残る緑釉対向C字形左右三転式宇瓦で，先の鐙瓦6と対になる宇瓦である。文様は対の鐙瓦の蓮華文を強く意識したC字形中心側文から優雅な唐草が左右にほぼ均整に大きくうねって転回する文様で，平安宮を代表する瓦である。文様面の幅は最大35cm，中心部厚さ9.2cmとかなり大きく，取り上げ段階では三個体に割れていて文様面の右上部を若干破損していたが，平瓦部が半分程度まで斜めに残存しており，施釉範囲がよく分かる資料である。屋根を下から見上げる時に見える顎部及び両側面では文様面から20cm近くまで，また上部内曲面も文様面から10cm強まで施釉されており，下から見える範囲のみ緑釉を幅広に施していたことが分かる。また作りは，断面観察から平瓦を芯にして粘土を付加して作瓦している。緑釉宇瓦はこのほかに破片が3点出土している。

8は対向C字形左右三転式宇瓦とみられ，栗栖野瓦屋の製品と考えられる。9・10は対向C字形左右三転式宇瓦で，大谷高校内の池田瓦窯の製品である。11は『栗』字銘対向C形左右三転式宇瓦で，中心飾りに『栗』の裏文字を冠する。所謂「延喜式」記載の洛北岩倉の栗栖野瓦屋の製品で，平瓦部後端の一部を欠損するがほぼ完形品である。唐草は円に近い複線で立体的に表現する独特の文様構成で左右均整ではない。平瓦内曲面にはかなり荒い瓦衣圧痕を残す。

鴟尾（図7参照）

鴟尾は2点出土したが，いずれも無釉のものである。鴟尾1は図7のように，鴟尾の上方部の縦・横とも18cmほど残欠である。二箇所の凸帯に挟まれた四つの饅頭形の連珠は接合面から離脱

している。鴟尾２は，底部の鰭端部分の縦・横とも24cmほどの残欠で，胎土は良好，荒削りであるがよくまとまった造りをしている。鰭は外から見える側は上方に向かって段差（正段）を付けてタタキ圧痕を削って成形，裏面はその逆の下向きに段差（逆段）を付け，叩き圧痕を残す。鰭後部は縦溝状の叩き圧痕，鰭後部から腹部にかけては縦溝状及び青海波状の叩き圧痕を残す。

出土遺瓦は，このほかに数点の文様不明の軒先瓦や磚瓦なども含み，いずれも既往の豊楽院や朝堂院など平安宮跡の発掘調査で出土しているものが大半である。

全体的には，過去の豊楽院跡の調査で出土した資料とも大差なく，時代は平安時代前期から中期頃で，搬入瓦が少なく官窯系の製品が多いことも豊楽院出土瓦の特徴であろう。

4　まとめ

当該地の西端で予想された東華堂の基壇等の構築物を確認することはできなかった。既往の豊楽院内の調査ではいずれも現地表面直下から遺構が検出されており[3]，今回のように地表下1.0m以上，砂礫層にまで達する近世以後の土取りでは，痕跡すら残らないかもしれない。ただし，東華堂の大部分に相当する西側隣接地では十分な注意が必要と考えられる。

（梶川敏夫・馬瀬智光）

註

1）『平安時代史事典』下巻（財団法人古代学協会・古代学研究所）1994年　2243頁

2）『平安時代史事典』下巻（財団法人古代学協会・古代学研究所）1994年　1717頁

3）「平安宮豊楽院（1）」・「平安宮豊楽院（2）」『平安京跡発掘調査概報・昭和63年度』（京都市文化観光局）1989年

Ⅲ　平安京左京五条三坊三町跡　No.30

1　調査経過

調査地は，下京区新町通高辻上る岩戸山町435他5筆で，新町通の西側に面し，菅大臣神社の東側隣接地になる。平安京の条坊では左京五条三坊三町の中央東部分に相当し，敷地東端に町尻小路が通っていたと推定される。当該地は，山田邦和氏編の『平安京邸宅一覧』によると，平安時代中期には菅原是善の『白梅殿』があった場所とも考えられている。

今回はこの場所で，立体駐車場の建設が計画されたため，試掘調査を平成10年9月1日に行った。調査の主眼は白梅殿および町尻小路の西側側溝の残存度を調べることであった。

調査の結果，平安時代の土壙1基，中世の土壙3基を検出した。なお，2トレンチの土壙3基については，検出のみで終了している。

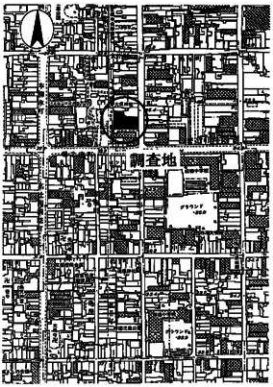


図8　調査位置図（1：5,000）

2　遺　構

計画建物の北端に設定した1トレンチは，幅1.1～1.7m，長さ21.2mを測る。このトレンチは，町尻小路の側溝を検出するために，敷地の東端に可能な限り近づけた。また，その中央部で大型の溝状遺構を検出したため，南側に拡張して遺構の形状の把握に努めた。

一方，計画建物南端に設定した2トレンチは，幅1.4m，長さ18.6mを測る。このトレンチの中央部で3基の土壙を検出した。

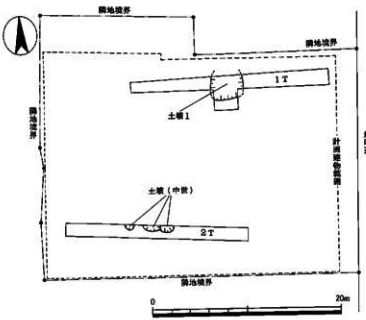


図9　トレンチ位置図（1：400）

層序　近・現代の井戸や大火の後始末の際に掘られた瓦の廃棄土壙等により，特に１トレンチでは撹乱が著しい。比較的残りの良い，土壙１付近で層序を確認すると，近現代の盛土が地表下約１ｍまで続いている。この下層に灰色泥砂の整地層が40～70cmの厚さで存在している。灰色泥砂の下層に，鎌倉から室町期の遺物包含層があり，地表下1.6～1.9ｍで土壙１の遺構成立面である淡黄色砂泥層になる。

２トレンチでは撹乱の影響は地山まで達していないものの，遺構密度は低く，地山の褐色砂泥層は地表下1.9～2.2ｍで認められる。地山面は西に向かって緩やかに下がっている。

土壙１（図10）　径3.3ｍの隅丸方形の土壙で，掘形は二段落ちで，検出面からの深さは1.1ｍである。埋土の状況から，複数の土壙が切り合っている可能性が高いが，遺物の年代は比較的まとまっており，特に埋土最上層の灰色泥砂の底に炭と土器が密集していた。

写真４　土壙１北壁断面（南東から）

写真５　２トレンチ完掘状況（東から）

３　遺　物

紹介する遺物は，土壙１の灰色砂泥層の出土遺物を中心とする。土壙１出土遺物に関しては，口縁部の破片点数から器種別の出土割合を求めた。

土壙１出土遺物（図11　1～17）　出土した土器片の内，口縁部を伴う破片総数は，257片であった。口縁部破片総数の93.77％（241片）は土師器皿類が占めていた。以下，その他の土師器1.17％（６片），白色土器0.39％（１片），須恵器0.39％（１片），焼締陶器の甕0.39％（１片），瓦器1.17％（３片），黒色土器0.39％（１片），灰釉0.39％（１片），輸入白磁1.95％（５片）となった。これらの破片数の割合は，烏丸線内遺跡No.77地点出土土器の平安時代後期後半の資料を分析した小森・上村両氏の器種別割合の分析結果とほとんど一致している[1]。

土師器皿の中で主体的な位置を占めるのは，口縁部が「て」字状に屈曲した形態をもつ皿Ａ（１～５）と，二段のナデ痕跡が明瞭で，口唇部の外反する皿Ｎ（７・10～12）[2]である。口縁部総破片数にしめる割合は前者が36.96％，後者が42.02％となり，この２種類で全体の８割を越している。皿Ａの口径分布は，10.0cm～10.5cmの付近に集中している。一方，皿Ｎは口径が10.5cm

付近のものと，15.0～17.0cmの大小２法量を中心に分布している。

土師器皿では他に，小森・上村編年の平安京Ⅴ期で主流となる口縁端部を上方に立ち上げる皿Ｎ（６）が一定量(3.11%）出現している。また，口唇部が外反し，側壁が外上方に立ち上がる皿で，ナデ調整の痕跡が一段のもの（９）も24点（9.34%）出土している。

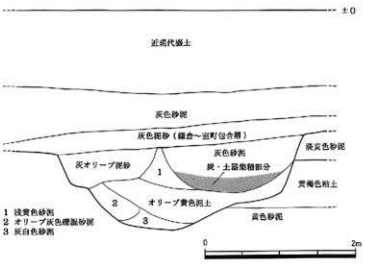


図10　１トレンチ土壙１部分北壁土層図（1：50）

その他の器種では，瓦器ミニチュア羽釜（８），玉縁口縁をもつ輸入白磁（13･14），器高が低く，側壁の内彎する輸入白磁皿とその高台部分（15）も出土している。また，回転台土師器の高台部分（16）も出土しているが，欠損している体部は皿形をしていたと考えられる。土師器高坏の脚部（17）は削り調整を行った後，坏部との接続部分を横方向にナデ調整が行われた痕跡が残っている。その他図示していないが，常滑産と考えられる焼締陶器の甕や，瓦器椀等が出土している。

灰色泥砂出土遺物（図11　19～22）　白色系土師器と，赤色系土師器を主体とする一群である。白色系土師器は，口径の分布が７cm前後を中心とし，底部中央部を押し上げたいわゆるへそ皿（19）と呼ばれる小皿がある。また，口径の分布が11.5cm～12.0cmに分布の中心をもち，口唇部を受口状にした，底の深い大皿（21・22）も認められる。前者は小森・上村分類[3]では皿Sh，後

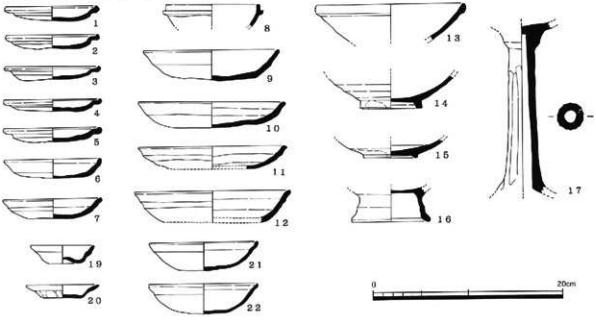


図11　１トレンチ出土土器実測図（1：4）

者は皿Sに相当する。

赤色系土師器は，口径の分布が7.5cm～8.0cmを中心とする小皿8点を収集した。小森・上村分類の皿Nに相当するこの一群（20）は，体部を強く指頭で押すため指頭の痕跡が明瞭に残り，器壁もこの部分で一番薄くなる。口縁部は外方に大きく外反し，底部は平底である。

4　まとめ

調査面積が狭いこと，撹乱が著しいことから，当該地全体の状況は不明である。しかし，1トレンチ中央部で検出した土壙1は，その埋土最上層の灰色砂泥から，平安時代後期の土器群が出土している。この土器群は小森・上村編年の平安京Ⅳ中～新（11世紀後半）と考えられる。一括資料としては，平安京左京六条一坊八町SE3に類例が認められる[4]。

また，この土壙1を覆っている中世の包含層は，小森・上村編年の平安京Ⅷ中（14世紀後半～15世紀初頭）頃のものと考えられる。

当該地周辺は中世以後，下京の発達に伴う開発で平安時代の遺構が残存する可能性はあまり高くなかった。特に，建物の配置などを明らかにすることは現在でも困難である。しかし，今回検出した土壙のように当時の生活物資を廃棄するために構築した遺構や井戸は深いため，撹乱の影響が柱穴等に比べて小さい。今後は，土壙1で見られるような廃棄パターンや井戸の配列分析等を進めることで，左京域の平安時代の様相が徐々に明らかになるであろう。

（馬瀬智光）

註

1）小森俊寛・上村憲章　「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）1996年　表－1参照。

2）同上文献表－5及び図－5参照。

3）同上文献表－6及び図－9参照。

4）『古代の土器3・都城の土器集成』（古代の土器研究会編）1994年32頁参照。

Ⅳ　嵯峨七ツ塚４号墳　No.49

１　調査経過

調査の場所は，右京区北嵯峨にある嵯峨七ツ塚古墳群の４号墳南側である。ここには現在，４号墳を南に迂回する細い農道と用水路があるが，これを京都市が拡張整備する計画を立てたため，四号墳が周濠を伴っていたかを確認するため試掘調査を11月16日に行った。

嵯峨七ツ塚古墳群は，大沢池と広沢池との間の水田地帯に，東西・南北300mのエリア内に点在する７基の古墳の総称であるが，北端の１号墳は既に全壊状態である。残りの６基は３基づつが等高線に沿って東西に並び小グループを形成している。現状では直径10～25mの墳丘を保っているが，耕地化によってかなり削平され半壊の状態で，当初は直径30mほどの規模を有していたと言われている。

写真6　調査地遠景（南から）

４号墳は現状で直径15m，高さ約４mを測り，墳頂部に天井石と思われる石が２個露出し，横穴式石室が良好に残存しているものと推測される。また二つの天井石から石室の主軸は北西方向を向いていると予想

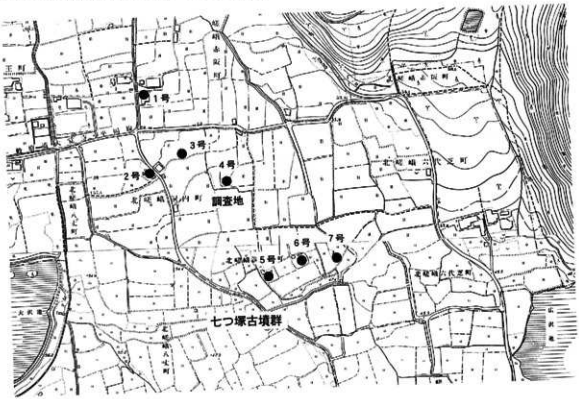


図12　調査位置図（1：5000）

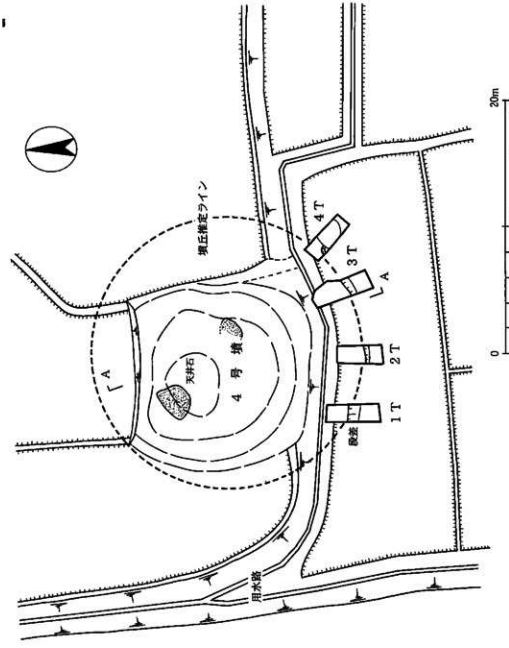


図13　トレンチ位置図（1：300）

される。しかし墳丘自体は四方を田圃で囲まれているため，開墾による蚕食が著しく，特に墳丘の北側斜面はほぼ垂直に削り取られ，同様に東面もきつく削られてしまっている。このため墳丘の平面形は四角形に近い形にまで変形している。さらに，南側を流れる用水路を掘ったとき封土を削り，U字管を埋設した後にマウンドを復旧したため，後から積んだ土のところがズリ落ちそうになっていた。この部分については，今回の施工工事で石垣による補強措置が図られた。

2　調査の概要

調査は四号墳の南側にある田圃に南北方向のトレンチを四箇所設けて行った。各トレンチには掘削順に西から東へ番号を付した。個々の大きさは1トレンチが幅約1.5m・長さ4.4m，2トレンチが幅約1.5m・長さ3.5m，3トレンチが幅約1.5m・長さ4.8m，4トレンチが幅約1.5m・長さ3.3mと小規模なものである。

写真7　1トレンチ全景（北から）

各トレンチの堆積層は同様かつ単純で，耕土・床土が35cmほどの厚さで堆積し，その直下が地山の黄褐色砂泥（礫混じり）となる。地山面は墳丘寄りではほぼ平坦であるが1～3トレンチでは，トレンチ北端から1.5～2m離れた地点で一段下がり段差を形成し，さらに南に向かって徐々に落ち込む状況を確認した。4トレン

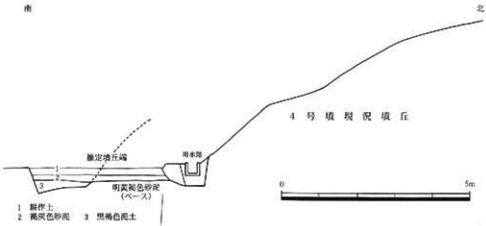


図14　3トレンチ東壁土層図（1：100）

チでも同様の落ち込みを西壁寄りで検出したものの，東へは続かなかった。

段差の高低差は約30cmあり，落ち込んだ所には黒褐色泥土（黒ボク土）が堆積していた。各トレンチで発見した顕著な遺構はこの段差だけで，これがさらに溝のような遺構になるのかは調査地外のため明らかに出来なかった。しかし，段差は４号墳の周縁に沿って認められることから，かつての墳丘の端を示す痕跡として捉えることとした。

写真8　３トレンチ全景（北から）

今回の調査で出土した遺物は２トレンチの段差埋土から土師器の高杯脚部の破片１点。３トレンチからは耕土下の床土から須恵器の杯底部の小破片と平瓦の小破片が共に１点づつ出土した。これらの土器や瓦類はいずれも平安時代前期のものと推定される。図示した土器は２トレンチ出土の土師器である。

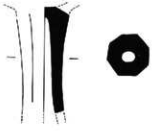


図15　出土土器実測図　(1：4)

3　まとめ

今回の調査では確実な古墳の周溝は検出出来なかったが，墳丘の周縁部と思われる地山の段差を確認することが出来た。現在の４号墳の平面形は一辺が15mほどの四角形であるが，今回検出した段差を墳丘の端部と仮定して墳丘径を復元すると直径約22mになる。これは七ツ塚古墳群中，最大規模を誇る６号墳が現状で直径22.5mあり，これと同程度の規模になる。

平安時代，嶮峨野地域には多くの別業や寺が造られており，調査地の周辺には遍照寺跡や嵯峨院（大覚寺御所跡）などがある。特に遍照寺は現在別の地に移っているが，元は大覚寺に比肩する規模の大寺院で，応仁の乱以後に衰退したといわれ，今は広沢池の北西岸部に推定方形堂跡を残すのみである。今回，数は少ないが平安時代の土器や瓦類が出土したことにより，当該地周辺にこれら別業に関連する何らかの遺跡の存在する可能性が高くなった。

（長谷川行孝）

V　名勝平安神宮神苑　No.11

1　調査経過

調査地は平安神宮神苑内の北西隅に位置する空き地で，敷地の北側は丸太町通に面し，西側は京都市武道センターに接している。この地に平安神宮が寮の建設を計画したが，当地が国指定の名勝「平安神宮神苑」内に位置することから，平成10年3月18日に担当課である文化財保護課と共同で試掘調査を実施した。

調査地一帯は平安時代後期になって天皇家の御所や寺院があいついで建設され，急速に開発された白河街区の一画に該当している。平安神宮の南方は，鳥羽天皇の御願によって元永元年(1118)に落慶供養された最勝寺の寺域に推定されている。また南西にある京都会館及びその北方の武道センターの南半部は堀川天皇の御願によって康和4年（1102）に落慶供養された尊勝寺の寺域に比定され，発掘調査においても堂宇の検出例が多い。

本調査地と武道センターの北半部とは，この尊勝寺の寺域を南北3町にとると，尊勝寺の境内地に含まれることになるが，現在は尊勝寺の北側にあったとされる，歓喜光院の寺域に推定されている。歓喜光院は鳥羽法皇の中宮美福門院によって永治元年（1141）に造営されたが，殿舎の配置や規模などはよく分っていない。

西隣りにある京都市武道センター敷地内の発掘調査では，平安時代後期の東西溝（幅3m・深さ1.5m）を24mにわたって検出し，ほかに2×3間の小規模な建物や井戸を7基ほど検出している。さらに弥生時代の方形周溝墓を4基発見している[1]。このうち東西方向の溝は，幅は広く

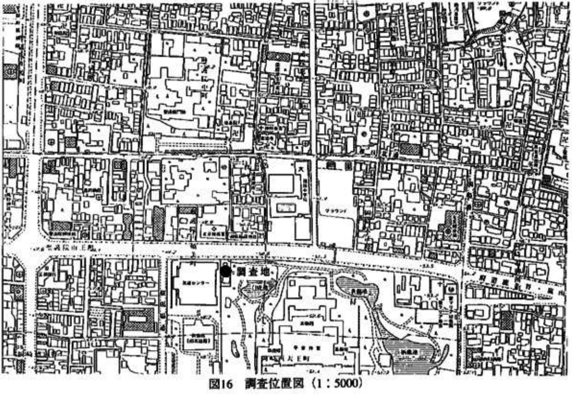


図16　調査位置図（1：5000）

かつ深くてしっかりしているため，歓喜光院の北限溝に推定されている。

今回の試掘調査は計画建物が南北に細長いため，敷地西寄りに南北トレンチを１箇所設けて行った。その結果，既述の東西溝の続きと思われる溝の南肩部を検出したことから，その方向を確かめるため，敷地の東端に小規模なサブトレンチ（２トレンチ）を設けてその位置を確認した。

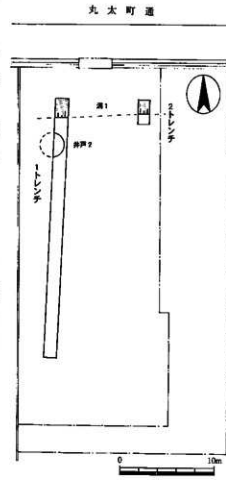


図17　トレンチ位置図（1：400）

2　遺構・遺物

調査地の基本層序は，上から表土・旧表土・土師器の細片を僅かに含む黒色砂泥（整地層）・黄褐色砂（地山）で，地山の白川砂検出面は地表下90cm前後である。遺構検出はこの地山面で行い，トレンチの北端部で東西溝の南肩部と思われる落ち込みを検出した。その南側では井戸１基を検出したが，この井戸は旧表土直下から掘り込まれた遺構である。なお，西側の調査地では弥生時代の方形周溝墓を発見しているが，当地では当該期の遺構・遺物は発見出来なかった。

溝１　トレンチの北端で検出した北への落ち込みである。位置的に西隣りの武道センター内で検出している東西溝の続きと考えられるため，溝と判断した。溝の規模は明らかにしていないが幅は1.8m以上，深さは約1mあり，地山の黄褐色砂を掘り込んで造られている。埋土は黒色泥砂で，その上層に堆積する黒色砂泥とよく似た土であることから，同じ頃に一度に埋め立てられて整地された可能性がある。

溝の底付近からは，平安時代後期の土師器の皿類や瓦類が出土した。皿類は破片が大きく，完形に近いものも含まれていることから，近くで使用し遺棄されたものと思われる。図示した土師器皿の内（1･3）は１トレンチから，他は２トレンチから出土した。皿類の口縁部は強くなでて上方へ立ち上げ，端部もつまみ上げるものが多い。瓦類のうち軒瓦は掲載した偏行唐草文軒平瓦だけで「半折り曲げ式」京都産の瓦である。

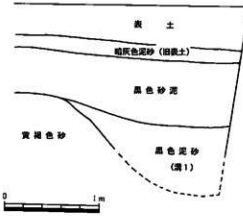


図18　１トレンチ北端西壁土層図（1：40）

井戸２　直径2.8mの円形の掘形を持つ井戸で，表土直下の黒色砂泥層から掘り込まれている。2.4mま

で掘り下げたが底は確認できず，また木枠・石組みなどの井戸構築材も発見出来なかった。素掘りの井戸の可能性もあるが，地山が白川砂であることから何らかの壁体を構築していたと思われる。井戸埋土からは平安時代後期の土師器皿や瓦片が若干出土した。

3　まとめ

本調査で検出した東西溝は，既に述べたように西側にある京都市武道センター内の発掘調査で検出した溝の続きと考えられ，今回の調査を含めると40数mにわたって続いていたことが判明した。溝は現在，歓喜光院の北限溝に推定されているが，溝の南側での調査では本調査を含めて井戸や掘立柱建物など雑舎的な遺構が中心で，直接歓喜光院に結びつけることには無理もある。しっかりした溝であるから何らかの区画溝であることは確かであるが，別の院などの区画溝の可能性もある。

（長谷川行孝）

註

1）辻裕司・丸川義広「尊勝寺跡」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1984年，辻裕司・鈴木廣司「尊勝寺跡」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1985年

写真9　1トレンチ全景（北から）

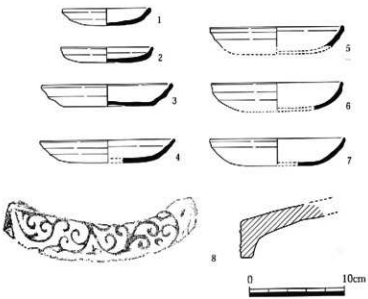


図19　出土遺物実測図　(1：4)

Ⅵ　白河街区跡　No.60

1　調査経過

調査地は，左京区仁王門通新高倉東入正往寺町458他２筆を占める本正寺である。この本正寺は，二条通から西寺町通沿いに南に約80mのところに位置する。この付近一帯は，宝永５年（1708）の大火以降，御所東の寺町通にあった寺院を移したもので，現在では顕本法華宗本正寺をはじめ，浄土宗正往寺・同見性寺・同正念寺，黒谷浄土宗常念寺・同西昌寺・同大連寺，浄土宗西山禅林寺派仏光寺，浄土宗西山深草派三福寺，浄土宗専念寺の10箇寺が軒を連ねている[1]。

今回，本正寺本堂が阪神淡路大震災の影響で再建の必要性が生じたため，事前に白河街区の状況確認を目的とした試掘調査を行った。調査日は，平成10年６月３日・９月17日の２日間であった。

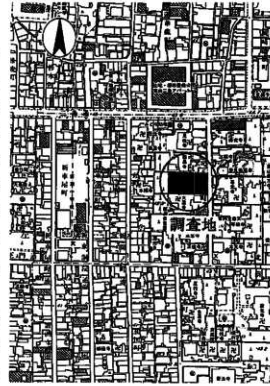


図20　調査位置図（1：5,000）

本堂や庭園が残った状態での試掘であり，トレンチの設定に苦慮した。結果として，本堂の西側に３箇所，東側に２箇所のトレンチを設定することができ，４トレンチにおいて，平安時代後期から鎌倉時代にかけて六勝寺に製品を供給したと考えられる工房跡を確認することができた。

この工房跡をはじめ，中世の遺物包含層などは，施主である住職のご理解を得て，設計変更で基礎深度を浅くしたことにより，地中に保存されることとなった。

2　遺　構

調査区　１トレンチは長さ2.8m，幅0.9mを測り，４トレンチと重複する。２トレンチは長さ2.8m，幅1.2mを測り，現地表下1.58mで地山の砂質土層を確認した。３トレンチは長さ2.9m，幅0.9m，４トレンチは

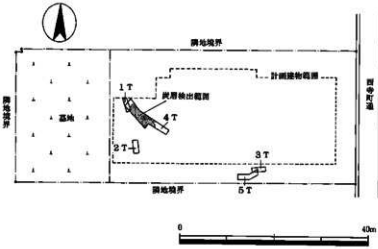


図21　トレンチ位置図（1：800）

不整形だが，延長10.3m，幅は1.2～2.5mである。トレンチ中央部で炭・鋳型片・土器片を大量に含む黒色炭層が広がっていた。最後に設定した5トレンチは，長さ5.0m，幅1.2mを測る。

層序　ここでは，鋳物を供給した工房跡に関連すると考えられる4トレンチの層序を記す。設定した基準高は本正寺正面の西寺町通にあるマンホールを基準にしている。この高度は設計深度にも利用されている。

現在の表土である黄褐色土から暗オリーブ色泥砂までは近世以後の整地土であり，その厚さは約130cmになり，基準レベルからは166cm低い。この整地層の直下に，黒色炭層が15cm程度の厚さで認められる。黒色炭層の下層には褐灰色砂泥の整地層があり，基準レベルから約190cmで地山の灰色砂層に至る。

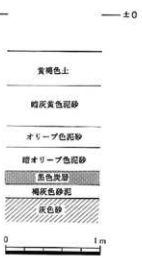


図22　4トレンチ北壁土層図（1：40）

黒色炭層　4トレンチの中央部を占め，東西2.5m以上，南北6.0m以上の範囲に広がっている。この層中に，大量の鋳型細片，土器片，焼土，炭が含まれている。この黒色炭層を一部断ち割ったが，工房跡そのものは検出されなかったため，使用済みの鋳型片等を工房に近接するこの地点に投棄したものと考えられる。

写真10　4トレンチ完掘状況（南東から）

柱穴　4トレンチ内で，一部黒色炭層と重複して検出された2個の柱穴があり，それぞれ径50cm，径70cmの円形であった。埋土は炭と焼土を多く含んでいた。これらは検出だけにとどめた。

3　遺　物

ここでは，一定量を採取した4トレンチの黒色炭層出土の遺物について，分析を進める。

黒色炭層出土土器（図23）　口縁部を伴う破片の総数は，159片であった。この内，88.20%を土師器皿が占めている。残りの10%余りについては，その他の土師器が3片（2%），白色土器2片（1%），瓦器椀2片（1%），輸入白磁11片（7%），輸入青白磁1片（1%）となっている。

器種構成で9割を占める土師器皿にあって，最も主体的な器形は2段のナデ痕跡が明瞭に口縁部に残り，その口縁部端部が上方に立ち上がるもので，小森・上村編年のV期にの皿Nに相当する[27]。この皿Nは破片数全体でも68%を占めている。口径は9.5～10.5cmを中心に分布する小皿群（2・3）と，15.0～15.5cmを中心に分布する大皿群に大別できる。

次に破片数の多い皿は，口縁部が短く内彎して上方に立ち上がる一段ナデのもの（9）であり，その分布の中心は9.5～10.0cmにある。

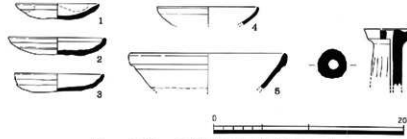


図23　4トレンチ炭層出土土器実測図（1：4）

他に目立つものとして，いわゆるコースター形の土師器皿Acや，土師器鉢・高坏・燭台（6），白色土器，瓦器椀がある。輸入陶磁器には内彎した先細りの口縁部をもつ白磁皿（4）4片や，玉縁口縁をもつ白磁椀（5）4片，青白磁合子1片等を認めることができた。

黒色炭層出土鋳型片（写真11）　一片の大きさが2～3cmのものから，大きいものでもせいぜい6cm角のものまで，145片を採取した。これらの鋳型でどのような製品を供給していたのかは，その型面が無文のものが多く不明である。鋳型の色調は黄橙色から黄灰色のものが多く，型の表面には雲母が多く見られる。また，胎土中には直径2～3mmの大粒の白色砂粒が含まれている。採集した鋳型片は，型面と反対側，つまり，外側に木目状の圧痕があり，鍔状の突起の付いているものが多い。鋳型の器壁の厚さは，8mm程度のものから3cmのものまであり，厚さ1cm程度のものが最も多い。鋳型の型面に緩やかなカーブが認められることから，大型で円形の鋳物の製作に使用された可能性がある。

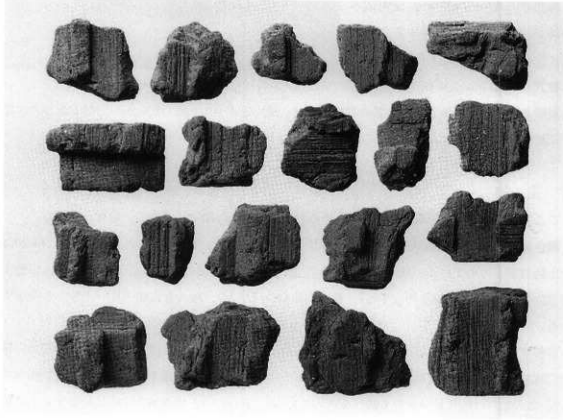


写真11　4トレンチ炭層出土鋳型片（撮影　村井伸也）

4　まとめ

4トレンチの黒色炭層で検出された土師器皿や輸入陶磁器から，鋳造関連施設の活動時期は，小森・上村編年のV期古～中の時期（12世紀前半）と考えられる。鋳型が細片で出土することに関しては，山本雅和氏のご教示[3]によると，「鋳型に利用する土は良質のものが多いため，再利用を前提として作業場の床面に撒き，踏みしめることで，再利用可能な大きさに還元することがある」，とのことである。このような鋳型の再利用も視野に入れながら今後は分析を進めていきたい。

平安時代後期に当該地の周辺は天皇の御願寺である六勝寺が創建されている。これらの寺院は大量の仏具を必要としたであろうし，従来調査のなかった西寺町通界隈での鋳造関連施設の発見は，六勝寺の必要とする製品の供給体制を解明する資料の一つになると考えられる。

12月7日に墓地を挟んで西側の土地で試掘調査を行っているが，平安時代後期の南北溝1条を検出したものの，鋳造に関連する遺構や焼土層等は検出できなかった。

（馬瀬智光）

謝辞

鋳型については，（財）京都市埋蔵文化財研究所の山本雅和氏と、南孝雄氏に御教示を頂いた。

註

1）『京都市の地名』日本歴史地名体系27　1979年　176頁を参照。

2）小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）　1996年　187～272頁。

3）財団法人京都市埋蔵文化財研究所の山本雅和の御教示による。

Ⅶ　史跡青蓮院旧仮御所　No.12

1　調査経過

調査地は，東山区栗田口三条坊町69で，史跡青蓮院旧仮御所のほぼ中央部に相当する。この場所で華頂殿（白書院）を拡張する計画が立てられたため，事前に試掘調査を行うことになった。『華頂要略巻第三下』中の「山上山下御本坊殿舎堂塔新古指図」から，明治26年(1893) 9月29日の全山焼失以前に当該地は清所であったことがわかっている。平成10年(1998) 1月13日に試掘調査を行った。

調査の結果，4面の整地層を確認するとともに，26個の礎石，礎石列2，東西溝1条を検出した。東西溝（SX27）から出土した土器群は，17世紀後半の良好な一括資料である。

2　遺　構

調査では，まず計画建物の中央部に南北方向のトレンチを設定した。次にトレンチ南半で複数の礎石を検出したため，このトレンチを西側に拡張した。また，遺構検出面が非常に浅いため，ボーリングステッキを用いて地表下の礎石の位置も確認した。最終的に南北トレンチは幅0.6～1.1m，長さ11.8m，拡張区は2.3×3.9m，調査区全体の規模は4.8m×12m，57.6㎡となった。

層序　地表下10cmまで表土である黄褐色砂質土層があり，この下層に明治の火災を示すと考えられる焼土層が広がる。焼土層の下層から地表下45cmまでの間に，明黄褐色砂混じり粘質土，黄褐色粘質土，オリーブ色粘質土，オリーブ褐色砂質土の四層の整地層が連続して堆積している。オリーブ褐色砂質土の下層，地表下1.3mまでは土師器細片や炭を含む黄褐色礫混じり砂

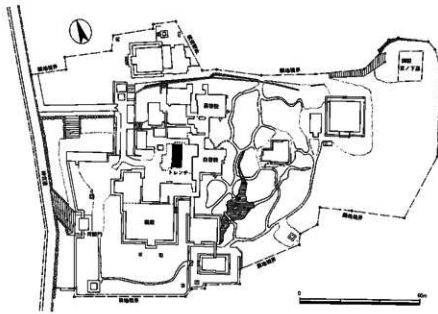


図24　青蓮院境内内調査位置図（1：1,500）

質土が続くが，これまでの整地土と異なり，締まりがない。地表下1.3m以下のにぶい黄色砂泥層では遺物の混入が認められないため，地山と考えた。

建物1　建物の一部に過ぎないが，礎石列を確認した。S4～S8，S10・S11で構成される。S10・S11間を除き，いずれも約1m等間隔である。S10・S11間は幅1.4mである。S11を除き検出した礎石列は，建物の庇部分または廊の部分に相当すると考えられる。第三の整地層であるオリーブ色粘質土上で成立している。

建物2　これも建物の一部分に相当する礎石列を確認した。S9・S12，S13～S16で構成される。柱間は1.2m等間隔である。S9・S12間には，本来S13～S16間と同じ柱間であったとすると，2個の礎石が後の改変により除去されたと考えられる。この礎石列は，SX27が埋められた後に構築されている。

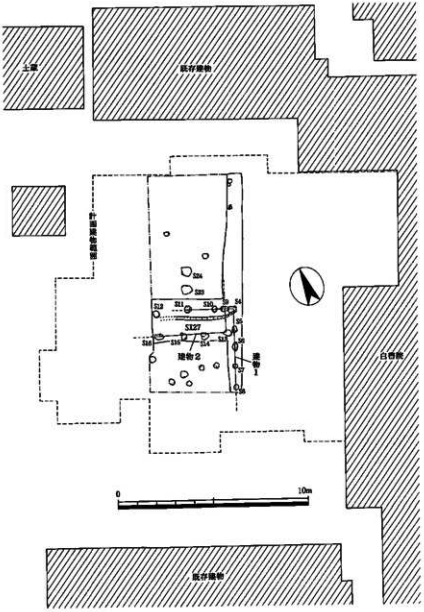


図25　トレンチ配置図（1：200）

SX27　灰色の埋土をもつ東西方向の溝で，緩やかに南に下がる。大量の土師器皿等が出土した。この溝の南肩は検出できなかった。調査区内では20cm程度の深さであるが，東に向かうに従い浅くなり，東端では礎石列との比高差が認められなくなる。この溝の北肩部は，建物1の礎石を掘え付けている整地土であり，建物1と同時期と考えられる。

3　遺　物

SX27出土遺物（図26）　今回の調査で出土した遺物の大半はSX27から出土した。口縁部を伴う破片285片のうち，内面見込み部分に凹線が一条巡る土師器皿（1～3）が97.19％（277片）を占めている。この皿は小森・上村分類[1]の皿Sになる。口径は8.0～16.0cmの範囲に分布するが，

この皿Sの破片数の84.5％が10.0～13.0cmの範囲に収まっている。

京焼は２片出土しており，(4) は底部を無釉に作った椀で，高台部分が鋭く削られ，中央部に浅い円刻が施されている。円刻に近接して「京作」と記した押印がみられる。

白磁は３片出土しており，図示した白磁猪口 (5) は，高台内部まで釉薬が施されており，器壁も非常に薄い。口縁部は輪花になっており，側壁内面も輪花の凹部にそって浅い窪みが見込み部分に向かって走っている。有田産の可能性がある。

その他，見込み部分に横向きの菊花を施した呉須赤絵片や，側壁に牡丹花を描いた呉須赤絵片が見られる。寛永通宝も１枚出土している。

写真12　法筵印塔取り上げ状況写真

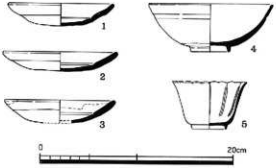


図26　SX27出土土器実測図（1：4）

法筵印塔基礎（写真12）　建物２の礎石であるS16の下方の整地土中に，天地逆の状態で埋められていた。塔身を置く台座部分の高さ2.5cm，連弁部の高さ11.5cm，基礎本体部分の高さ41cmの，合計高55cmの基礎である。台座部分の一辺は51cmで，中央部に径13cmのほぞ穴をもっている。基礎本体の一辺は77cmで，個々の面に幅47cm，高さ25cmの格狭間をもつ。

4　まとめ

抜き取られた石が多く，また，地上に近いため，石の再利用や移動が頻繁に行われており，建物１や建物２についてもその全体を復元することはできなかった。遺構の変遷としては，大量の土砂により整地した後，建物の建つ範囲が化粧されている。次いで建物１とSX27が築かれている。さらに，SX27を灰色埋土で埋め，再度整地し直した後，建物２が築かれている。その後も整地と建物の築造を繰り返し，最終的には明治の大火により，焼失したと考えられる。

（馬瀬智光）

註

1）小森俊寛・上村憲章　「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）　1996年　228頁～231頁参照。

Ⅷ　下鳥羽遺跡　No.74

1　調査経過

調査の場所は伏見区竹田松林町34番地，新油小路通の赤池交差点から南西方向にある，畑を埋め立てた造成地である。ここに床面積約350m²の工場が計画されたため，平成10年９月21日に試掘調査を実施した。調査地の周辺では平成５年度と本年度の２回，南北道路を挟んだ東向いの敷地で試掘調査を行っている。それらの調査では，耕作土の下層で分厚い湿地状の堆積を認めただけで遺構・遺物は見つかっていない。

今回の試掘調査は，Ｌ字形の計画建物に対して敷地の奥に南北トレンチを１本設けて掘削を行った。その結果，地表下２ｍの泥土上で掘立柱建物と思われる直径40～50cmの柱穴を５個を検出した。

2　遺構・遺物

調査地内の層序は，盛土下に耕作土，その下は褐色系の整地層が80cmの厚さで堆積し，地表下1.85ｍから下は灰色系の泥土と微砂（シルト）が交互に堆積し，当地が低湿地で水位や流量に変化のあったことが窺える。柱穴を検出したのは，さらにその下の地表下2.4ｍ以下に１ｍ以上も堆積する暗オリーブ灰色泥土の上面である。

掘立柱建物　泥土上で検出した柱穴は直径40～50cmの大きさで，南北に２個づつ，２列確認したことから少なくとも時期の異なる建物が２棟はあったと思われる。１棟の南北柱間は2.9ｍ，

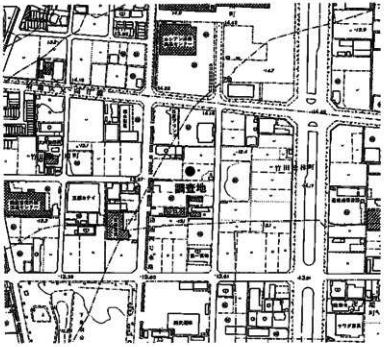


図27　調査位置図（1：5000）

図28　トレンチ中央東壁土層柱状図（1：40）

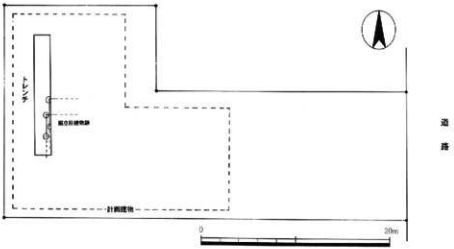


図29　トレンチ位置図（1：400）

他の１棟の南北柱間は2.1mある。建物の規模や時期については不明であるが，検出した泥土層の上に堆積する灰色泥土中からは土師器と須恵器の小破片が数点出土したことから，古墳時代ごろが想定される。

3　まとめ

下鳥羽遺跡は古くから弥生時代の遺跡として知られてきたが，発掘調査の機会は少なく，過去に２件しか行われていない。第１次の調査は倉庫建設に先立って行われたもので，本調査地から南に150mほどのところで昭和61年度に行われた。この調査では古墳時代後期の竪穴住居や掘立柱建物を検出し，下鳥羽遺跡内で初めて集落跡が確認された。翌年の昭和62年度に第2次の調査が，下鳥羽公園南側の研修ホテル建設に伴って行われた。この調査では弥生時代中期の方形周溝墓や竪穴住居，弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居，古墳時代の土壙墓，平安時代の井戸など多数の遺構を重複して発見したことから下鳥羽遺跡が弥生時代から古墳時代さらに平安時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明し，貴重な成果を得ている。この第2次調査地の南側を平成９年度に試掘調査したところ竪穴住居状遺構や溝状遺構などを検出し，さらに遺跡が南に広がることが判明した。

今回の調査では，予想以上に深い所で建物跡を検出した。柱穴も大きくしっかりした建物と思われる。しかし，建てられた地盤が軟弱な泥土層でこの上にも泥や砂が厚く堆積していることから，湿地の水位が低下した時に生活が営まれたと思われる。なお，現場は開発者の協力のもと，基礎の深さを浅くすることによって遺構保存を行った。

（長谷川行孝）

写真13　トレンチ全景（北から）

表２　試掘調査一覧表

平成９年度　　１～３月期

平安宮

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
妻松原	上・下立売通七本松西入西東町386-2他	3/2	GL-1.0mで明黄褐色砂泥の地山。近現代の攪乱著しい。	1
豊楽院	中・聚楽廻中町40-7の一部,40-17の一部	3/9・3/10	敷地の大半は攪乱。3基の土壙から大量の平安時代の瓦が出土した。本文4頁	2
豊楽院	中・聚楽廻西町186	12/3・3/25	GL-57cmで黄褐色砂泥の地山。近世の粘土採掘による攪乱。	3

平安京左京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
五条三坊九町	中・童侍町159-1他	2/2	GL-1.3mで室町時代遺物包含層。GL-1.6mでオリーブ褐色粘質土の地山。設計変更を指導する。	4
六条二坊二町	下・猪熊通五条上る柿本町590-4	3/4	GL-0.6mで中世の墓跡群。発掘調査を指導する。	5

平安京右京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
三条一坊七町	中・西ノ京星池町37-2他	3/30	GL-1.5mまで掘削するが，遺構・遺物なし。	6
四条一坊十町	中・壬生神明町1-36	2/18	GL-1.5mで平安期の南北溝5条，土器溜め1基を検出する。	7
四条二坊十町	右・西院東今田町10他	3/16	GL-0.8mで野寺小路東側溝等，南北溝2条を検出する。	8
八条三坊九町	下・七条御所ノ内西町45,45-3,45-17	2/9	敷地全体がアスガラによる盛土。	9

洛北地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
北野廃寺	北・北野下白梅町72,73-3	3/23	GL-2.0mで湧水，地山確認出来ず。	10

北白川地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
名勝平安神宮神苑	左・聖護院円頓美町50,50-1	3/18	平安時代後期の東西溝一条を検出。本文19頁	11

洛東地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
史跡青蓮院旧仮御所	東・粟田口三条坊町69	1/13	近世の礎石列と4個の敷地塀を確認。本文26頁	12
法性寺跡	伏・深草柑深町2-3他	3/11	GL-2.2mの地山直上まで近世の盛土。	13
中臣遺跡	山・柚辻番所ケ口町147,148,149,150	2/16	山科川の河岸段丘の低地に位置するためか，遺構・遺物なし。	14

伏見・醍醐地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
おうせんどう廃寺	伏・須草鈴ヶ谷40-32,33	1/19	過去の造成工事により遺構面は消滅か。	15

鳥羽地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
鳥羽離宮跡	伏・中島前山町55	1/21	GL-2.0mまで，湿地状堆積。	16

南・桂地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
上久世遺跡	南・久世中久世町1丁目4-1他,上久世町34	1/28	弥生～古墳時代の土壙墓状遺構1基，土壙1基。	17
上久世遺跡	南・久世上久世町58の一部,61の一部。	1/26-4/17	GL-0.5mで弥生時代～古墳時代の包含層。	18

平成10年度　　4～12月期

平安宮

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
内教坊・梨楽殿跡	上・中立売通大宮西入新元町217	5/11	梨楽殿東廂屋跡の西廂部を検出。	19
大蔵省	上・中立売通浄福寺西入加賀屋町384-3	4/27	GL-0.7m以下，砂礫層。	20
大蔵省	上・中立売通千本東入丹波屋町349-1	10/14	近世以後の土取りのため，GL-2.4mまで攪乱。	21
左兵衛府	上・松屋町通下立売上る一町目625-1	9/14	深い部分では，GL-2.0m以下で地山。粘土採取による攪乱。	22
西雅院	上・日暮通丸太町上る西入西院町747-8他	10/22	GL-0.6mで地山面。遺構・遺物は発見できず。	23
太政官	上・竹屋町通千本東入主税町825	8/3	竹屋町通の検出高から考えると遺構は既に削平されている。	24
朝堂院	上・竹屋町通千本東入梨楽町863	9/30	GL-0.5mで地山の梨楽上。明礼堂の西端は発見できず。	25
兵部省	中・西ノ京内畑町31	4/23	GL-0.7mで粘土取り穴。	26
刑部省	中・西ノ京内畑町15	6/10	GL-0.28cmで地山。方形土壙群を検出したため，発掘調査を指導する。	27

平安京左京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
三条四坊一町	中・東洞院通二条下る瓦之町367他	6/24	GL-2.2mで桃山時代の東西溝1条。	28
五条一坊五町	中・壬生相合町16,90-2	7/1	GL-0.38mで明黄褐色の地山を検出。攪乱が著しい。	29
五条三坊三町	下・新町通高辻上る岩戸山町435他5筆	9/1	平安時代末の土壙1基，中世の土壙3基を検出。本文11頁	30
六条四坊二町	下・五条高倉西入万寿寺町150他	11/24	GL-1mで砂礫層。遺構・遺物発見できず。	31

平安京右京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
北辺四坊一町	右・花園寺ノ中町8	11/30	表土直下が地山となり，遺構・遺物とも発見できず。	32
一条三坊十二町	中・西ノ京馬代町14-11	10/5	GL-0.6mで明黄褐色砂泥の地山。敷地中央部は湿地で，近世の耕作溝を除き，遺構は希薄である。	33
一条四坊四町	右・花園中御門町11-4,21-2	9/28	GL-0.9mの地山面で時期不明の南北溝1本，柱穴2個，小ピット2個等を検出。	34
一条四坊十三町	右・花園伊町41-1他	12/16	表土直下で，推定中御門大路北側溝を検出。	35
三条一坊二町	中・西ノ京柳尾町3-8他,泉池町4-3他	10/28	GL-1.8mで朱雀大路西側溝を検出。発掘調査を指導する。	36
四条三坊八町	右・西院上花田町10の1右京税務署	12/14	GL-1.0m以下，沼沢堆積。GL-2.2m以下，湿地状堆積。	37

五条二坊十町	右・西院平町6-1他	11/9	GL-0.7mで地山。遺構面は過去に削平されている。	38
五条四坊十四町	右・西院東貝川町62	8/10	GL-1.86mで地山検出。湿地帯や氾濫の痕跡を確認した。	39
五条四坊十四町・十五町	右・西院東貝川町60-2他	6/8	GL-1.4mの地山上で推定五条坊門小路北側溝等を検出。	40
六条三坊一町	右・西院寿町11-1,12-1他	10/29	調査地の南寄りで推定樋口小路北側溝の肩部を検出。旧建物の撹乱が著しく，残存状態は良くなかった。	41
六条四坊十一町	右・西京極東大丸町1	11/18	耕作土以下は湿地状の泥土堆積。	42
七条三坊六町	右・西京極中溝町2-8	11/5	湿地帯を大規模に整地して耕作地化。	43
七条四坊二町	右・西京極町ノ坪町10-1,11	12/15	湿地帯を大規模に整地して耕作地化。	44
九条二坊三町	南・唐橋平垣町64-3	8/19	GL-1.2mで平安時代の南北溝を検出。	45

太秦地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
和泉式部町遺跡	右・太秦森ヶ西町17-9他	6/1	敷地南半に掘立柱建物に伴う柱穴群，落ち込み等を検出。設計変更を指導する。	46
上ノ段町遺跡	右・嵯峨野岡町1-13他	10/26	遺構・遺物ともに発見できず。	47
西野町遺跡	右・嵯峨野千代ノ道町14-3	9/16	GL-0.85mで時期不明の土壙状遺構1基を検出。	48
嵯峨七ツ坂古墳群	右・北嵯峨別ノ内町	11/16	GL-0.3mで落ち込み状遺構を検出。本文15頁	49
史跡特別名勝天龍寺庭園	右・嵯峨天竜寺芒ノ馬場町68	7/22・23	勅使門正面土塁は江戸時代後期に施設された可能性が高い。大方丈西方では焼土面を検出した。	50

洛北地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
深泥池瓦窯跡	北・上賀茂ケシ山1番地	4/20	遺構・遺物ともに発見できず。	51
植物園北遺跡	北・上賀茂岩ヶ垣内町16,26	9/10	耕作地化以前は湿地帯と考えられ，遺構は発見できず。	52
北野廃寺	北・北野上白梅町46	4/1	GL-1.68mで地山。径30cmの柱穴1基を検出。北野廃寺の寺域外と考えられる。	53
北野廃寺	北・北野下白梅町25	11/26	GL-1.6m以下，近世から近代の池もしくは湿地。	54

北白川地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
史跡延暦寺境内	左・比叡山延暦寺	8/5	表土直下で性格不明の集石。	55
神林寺旧境内	左・永観堂町48他	4/15	GL-2.1mまで大量の礫が堆積。土石流か。	56
法勝寺跡	左・岡崎法勝寺町（岡崎公園内）	7/8	GL-1.5mで時期不明の東西溝1条を検出。	57
得長寿院跡	左・岡崎徳成町16-1,2	9/10	中世の包含層は存在するが，得長寿院に伴う遺構なし。	58
白河南殿跡	左・聖護院進修蔵町27	8/24	GL-1.3m以下，砂礫層。砂礫直上まで近世の堆積層。	59
白川街区跡	左・仁王門通新高倉東入正往寺町412-4他	6/3・9/17	GL-1.65mで大量の鋳型・土器片出土。平安末期から鎌倉時代の工房跡か。設計変更を指導する。本文22頁	60
白河街区跡	左・新岡ノ町通二条下る頭町344-1他	12/7	GL-1.0mで平安時代末期の溝1条，時期不明の溝状遺構を検出。	61

洛東地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
六波羅政庁跡	東・馬町造水町東入4丁目鋳銅町412-4他	6/22	表土直下からガイシや近代陶磁器片など出土。	62
法性寺跡	東・本町十五丁目802	4/8	表土直下で室町時代の土壙1基を検出。	63
山科本願寺跡	山・西野広見町30	11/19	表土直下が地山となり、遺構・遺物とも発見できず。	64
中臣遺跡	山・栗栖野打越町31-1	4/13	GL-0.25mで近代の南北溝一条を検出。	65

伏見・醍醐地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
伏見城跡	伏・桃山町永井久太郎67	10/19	GL-1.5mで地山検出。近代の耕作溝1条を検出。	66
伏見城跡	伏・桃山町松平武蔵15,16合併地他	12/21	GL-1.1mで伏見城の焼失時期に伴うと考えられる焼土塊1箇所、溝状遺構1基を検出。	67
伏見城跡	伏・新町十一丁目337の1他	1/11	表土直下から近代の鋳物工房の痕跡。	68
伏見城跡	伏・紙子屋町555,風詰町547-1	8/17	GL-1.2mで時期不明の整地層を確認。	69
伏見城跡	伏・伯耆町15他	12/9	3m近い造成が近代に行われており、桃山期の遺構・遺物は認められなかった。	70

鳥羽地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
鳥羽離宮跡	伏・竹田真幡木町137	10/12	GL-0.9m以下、湿地状堆積。	71
鳥羽離宮跡	伏・竹田田中宮町3,4,5	8/31	GL-1.0mで瓦器等を含む泥土の堆積、GL-2.0mで砂礫層。	72
鳥羽離宮跡	伏・中島中道町116他	7/6	敷地全体が湿地帯。	73
下鳥羽遺跡	伏・竹田松林町34	9/21	GL-2.4mで古墳時代の柱穴5個を確認。本文29頁	74
下鳥羽遺跡	伏・竹田松林町75,76	7/14	GL-1.2m以下、湿地状堆積で、遺構なし。	75
下鳥羽遺跡	伏・下鳥羽西芹川町68,69,70	10/21	GL-1.0mで弥生から古墳時代の溝を多数検出する。設計変更を指導する。	76

南・桂地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
中久世遺跡	南・久世中久世西丁目81-1	11/4	GL-0.8mで溝1条、方形土壙1基を検出。	77
中久世遺跡	南・中久世町三丁目67	5/19	GL-1.7mで奈良時代？の道路跡、GL-2.7m以下、砂礫層。	78
大藪遺跡	南・久世殿城町535,539-1	4/7	GL-1.64mで地山検出。敷地南半で弥生時代の湿地状堆積。	79

長岡地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
長岡京跡	南・久世都山町209	10/8	GL-1.0mで地山検出。湧水著しい。	80
長岡京跡	南・久世殿城町312-1他	9/7	敷地全体が寺戸川の氾濫堆積か。	81
長岡京跡	伏・羽束師菱川町491-1	12/2	氾濫堆積を整地して、耕作地化されている。	82
長岡京跡	伏・羽束師菱川町654-5	6/29	GL-1.92mで土壙状遺構4基を検出。	83
長岡京跡	伏・羽束師志水町185-1,186-1	7/27	GL-1.1mで土壙状遺構1基を検出。	84

報告書抄録

ふ り が な	きょうとしないのまいそうちょうさのがいほう
書 名	京都市内遺跡試掘調査概報　平成10年度
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	
シ リ ー ズ 番 号	
編 著 者 名	梅川敏夫・長谷川行孝・馬瀬智光
編 集 機 関	京都市埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
発 行 機 関	京都市文化市民局
所 在 地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
発 行 年 月 日	西暦1999年3月31日

所収遺跡名	所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
平安宮跡 豊楽院	京都府京都市平京区 紫宸殿中町	26100		35度 0分 53秒	135度 44分 37秒	1998/3/9・10	38	共同住宅
平安京跡 左京五条三坊	京都府京都市平京区 新町通高辻上る 菖蒲谷町	26100		34度 59分 50秒	135度 45分 33秒	1998/9/1	62	駐車場
蟻峰七ツ塚古墳群	京都府京都市右京区 北嵯峨剣ノ内町	26100		35度 1分 36秒	135度 41分 15秒	1998/11/16	24	農道整備
名勝平安神宮神苑	京都府京都市左京区 聖護院内丸美町	26100		35度 0分 50秒	135度 47分 2秒	1998/3/18	45	寮

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安宮跡 豊楽院	宮殿跡	平安時代	土壙	緑釉軒瓦・鴟尾・軒瓦	
平安京跡 左京五条三坊	都城跡	平安時代	土壙	土師器・須恵器・磁器	
蟻峰七ツ塚古墳群	古墳	古墳時代	落込み状遺構	土師器・須恵器・瓦	
名勝平安神宮神苑	庭園	平安時代	溝	瓦類・土師器	

ふ り が な	きょうとしないいせきしちょうさがいほう
書 名	京都市内遺跡試掘調査概報　平成10年度
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	
シ リ ー ズ 番 号	
編 著 者 名	梅川敏夫・長谷川行孝・馬瀬智光
編 集 機 関	京都市埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
発 行 機 関	京都市文化市民局
所 在 地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
発 行 年 月 日	西暦1999年3月31日

所収遺跡名	所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
白川街区跡	京都府京都市左京区 仁王門通新高倉東入 芝崎等町	26100		35度 0分 34秒	135度 46分 45秒	1998/6/3・ 9/17	40	共同住宅
史跡青蓮院 旧仮御所	京都府京都市東山区 粟田口三条坊町	26100		35度 0分 15秒	135度 47分 10秒	1998/1/13	58	寺
下鳥羽遺跡	京都府京都市伏見区 竹田段川原町	26100		34度 56分 31秒	135度 45分 10秒	1998/9/21	22	倉 庫

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白川街区跡	都城跡	平安時代	土壙	土師器・鉢型	設計変更を指導する
史跡青蓮院 旧仮御所	史跡	江戸時代	礎石建物	土師器・陶磁器類	
下鳥羽遺跡	集落跡	古墳時代	掘立柱建物	土師器・須恵器	設計変更を指導する

図　　版

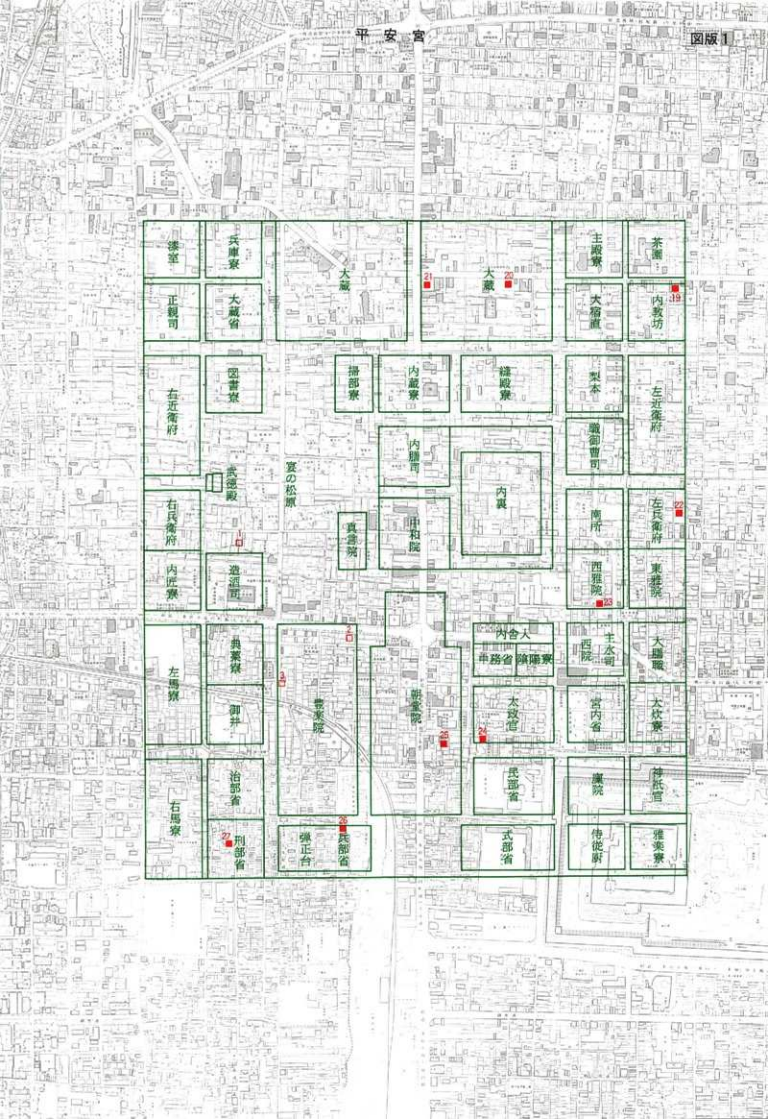
凡　例

平成10年試掘調査地点

□ 1月～3月　　■ 4月～12月

－－－－－ 遺跡範囲

図版1

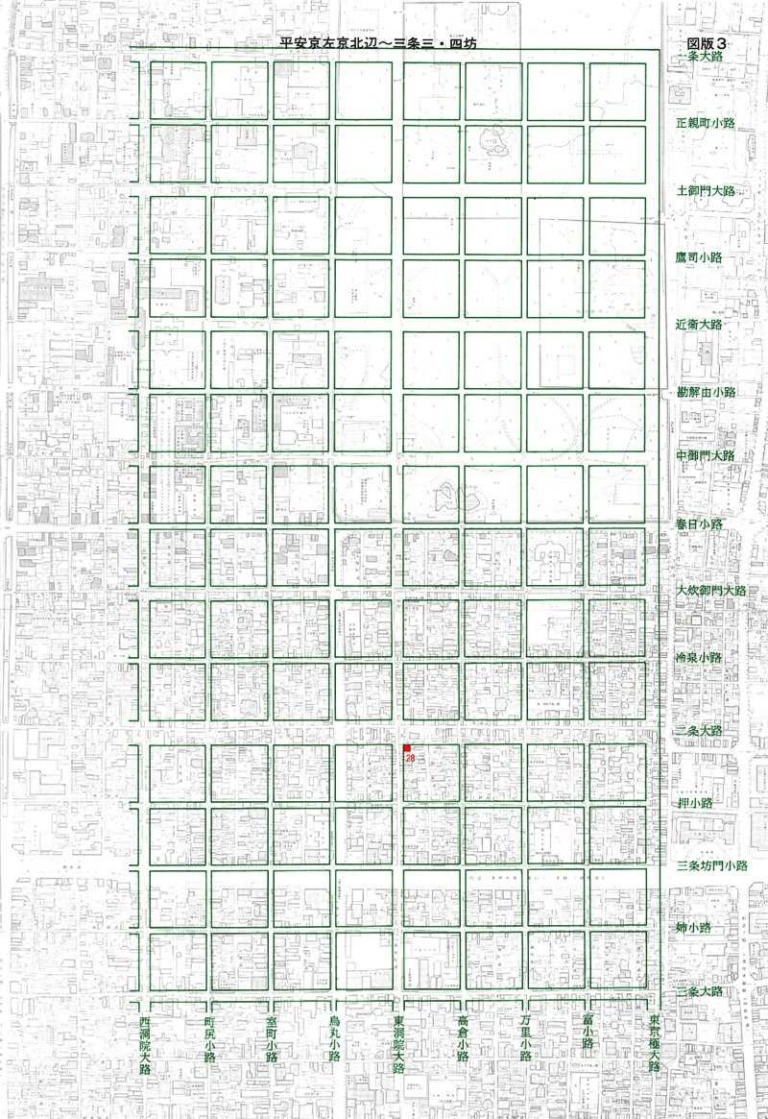

平安宮
漆室
兵庫寮
正親司
大蔵省
大蔵
大蔵
主殿寮
茶園
大膳職
内教坊
図書寮
右近衛府
掃部寮
内蔵寮
縫殿寮
製本
左近衛府
職御曹司
内膳司
内裏
宮の松原
武徳殿
右兵衛府
真言院
中和院
南所
左兵衛府
造酒司
内匠寮
西雅院
東雅院
内合人
陰陽寮
中務省
主水司
大炊寮
左馬寮
兵部寮
御井
豊楽院
朝堂院
太政官
宮内省
治部省
民部省
式部省
諸院
神祇官
右馬寮
刑部省
弾正台
兵部省
侍従所
雅楽寮

図版2

平安京右京北辺～三条一・二坊

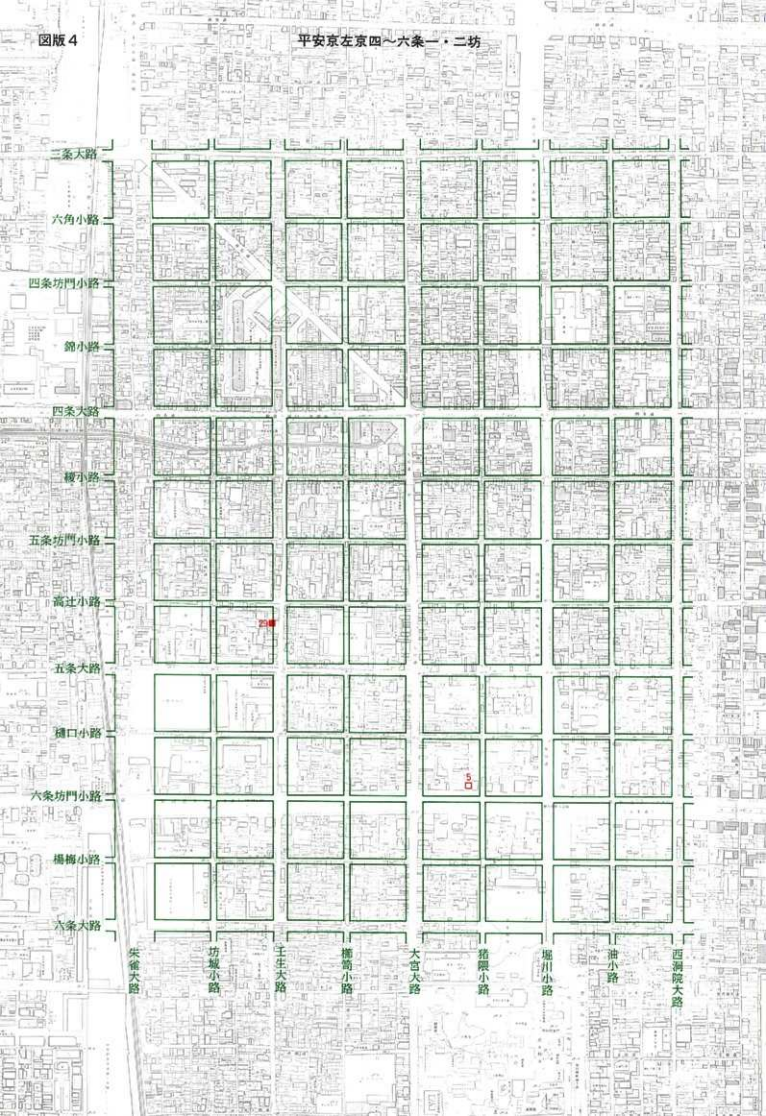
図版３

平安京左京北辺～三条三・四坊

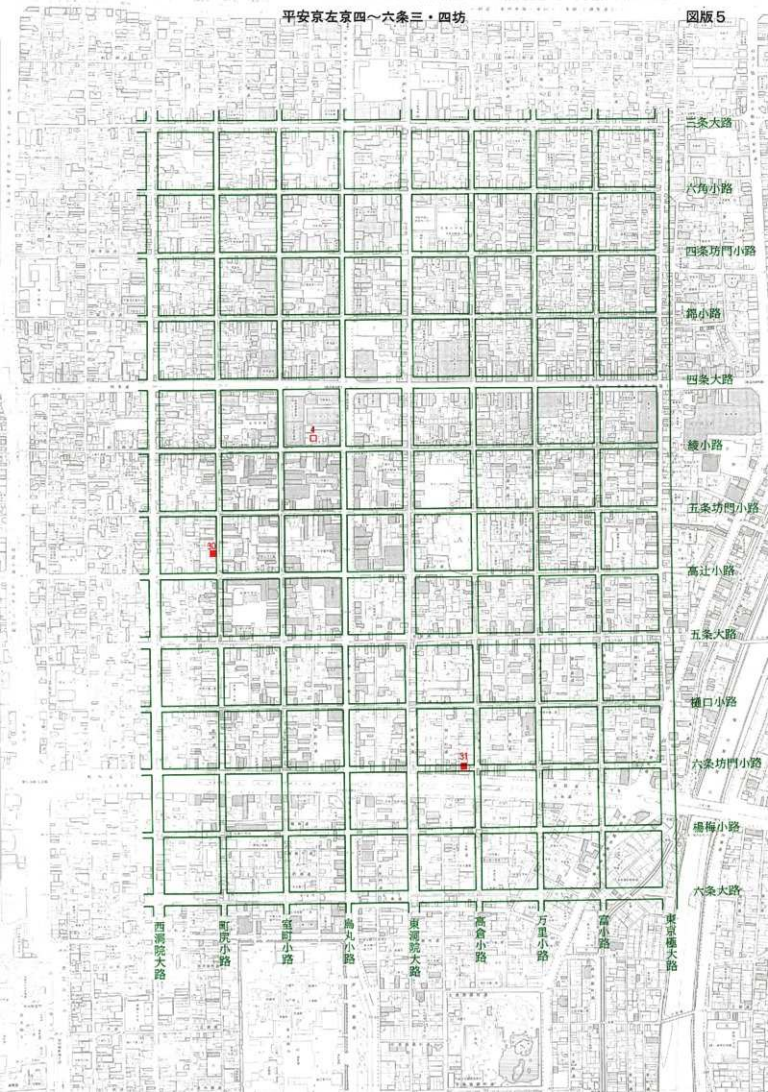


図版4

平安京左京四～六条一・二坊



平安京左京四～六条三・四坊



図版6

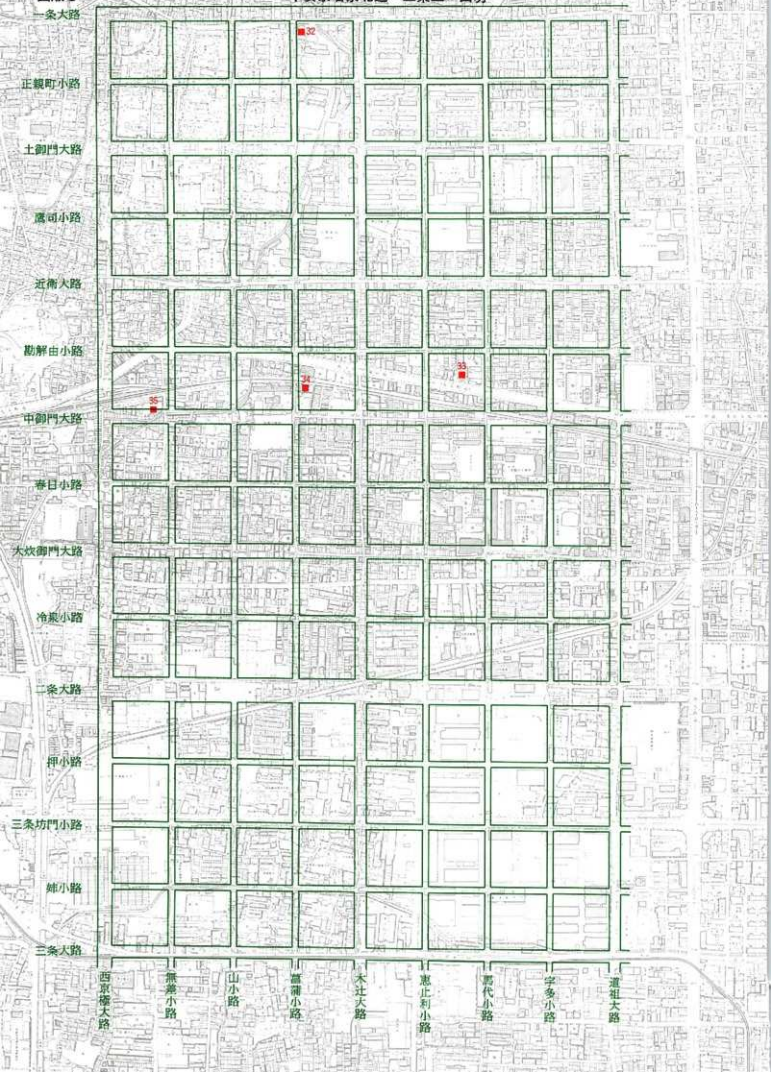
平安京左京七～九条一・二坊

図版7

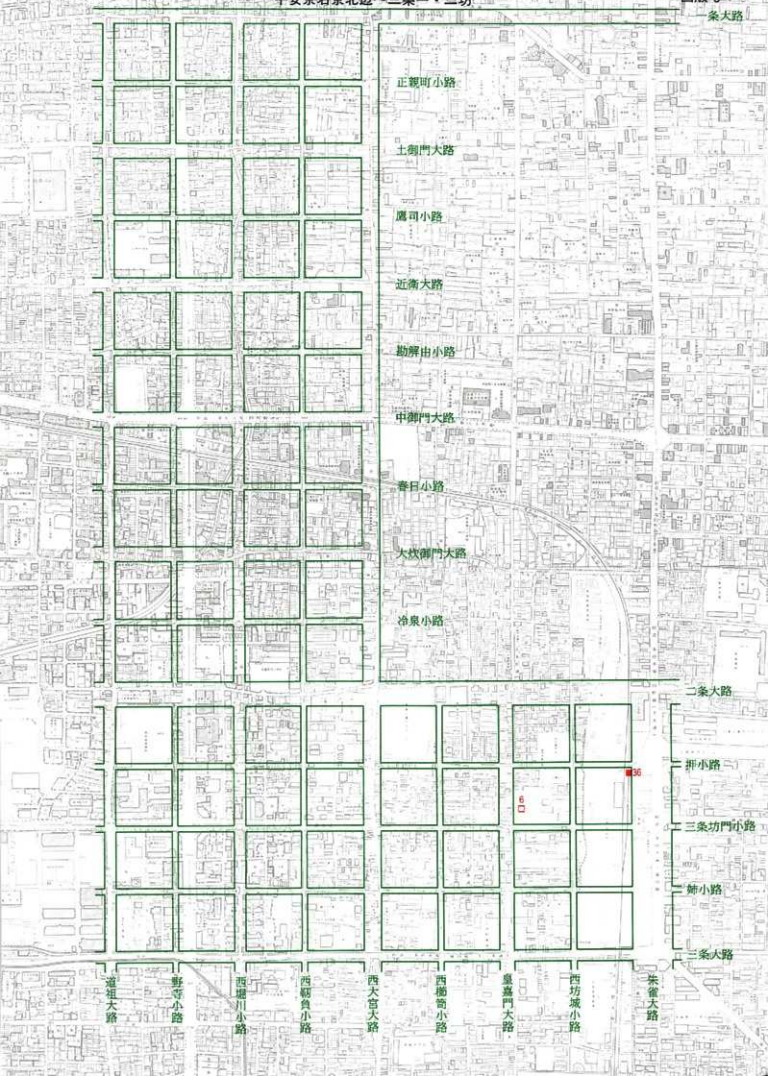
平安京左京七～九条三・四坊

図版8

平安京右京北辺～三条三・四坊

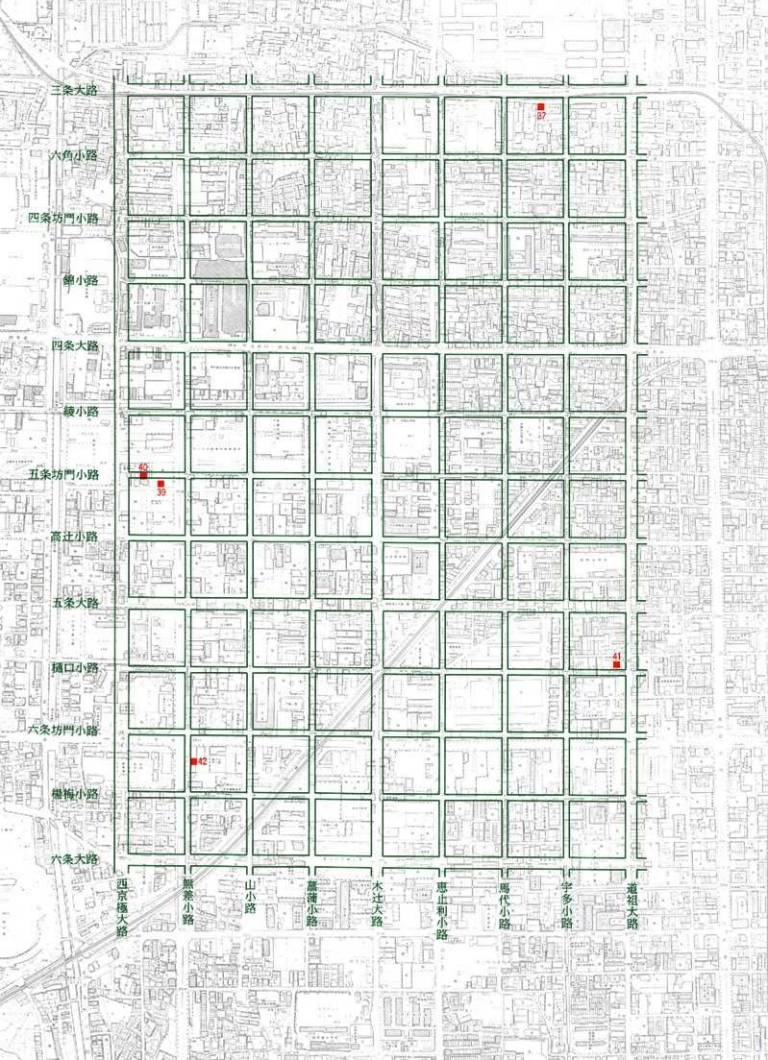


平安京右京北辺～三条一・二坊



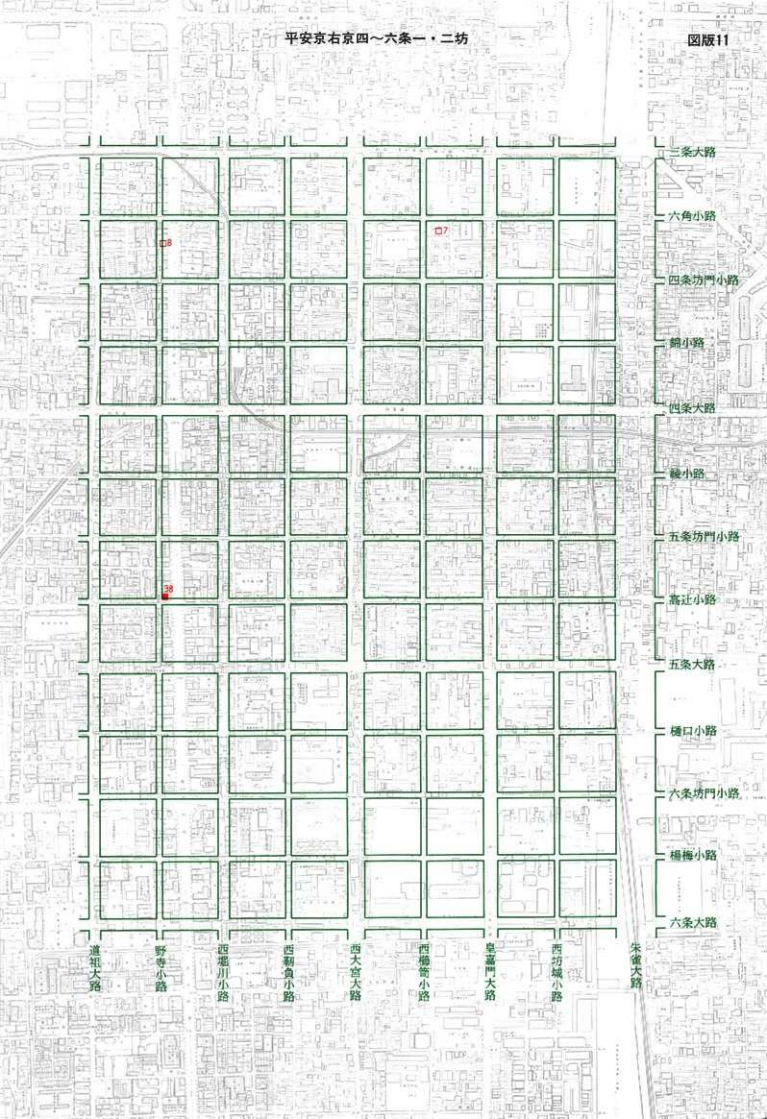
図版10

平安京右京四～六条三・四坊



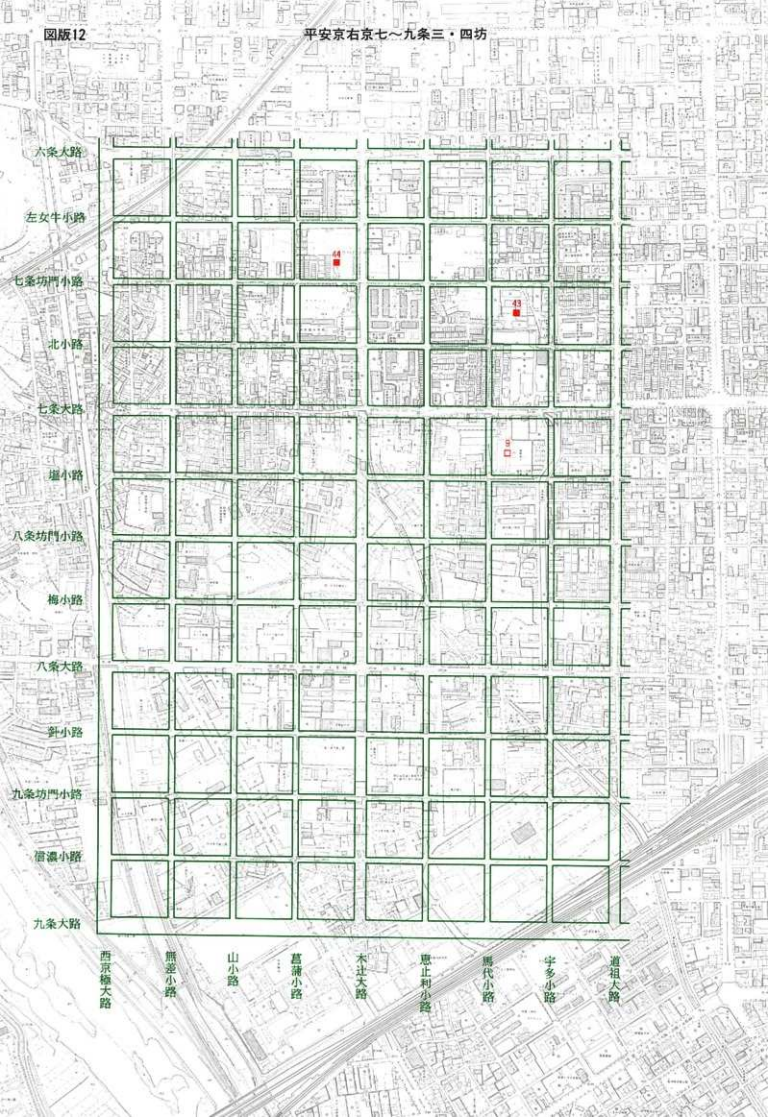
平安京右京四～六条一・二坊

図版11



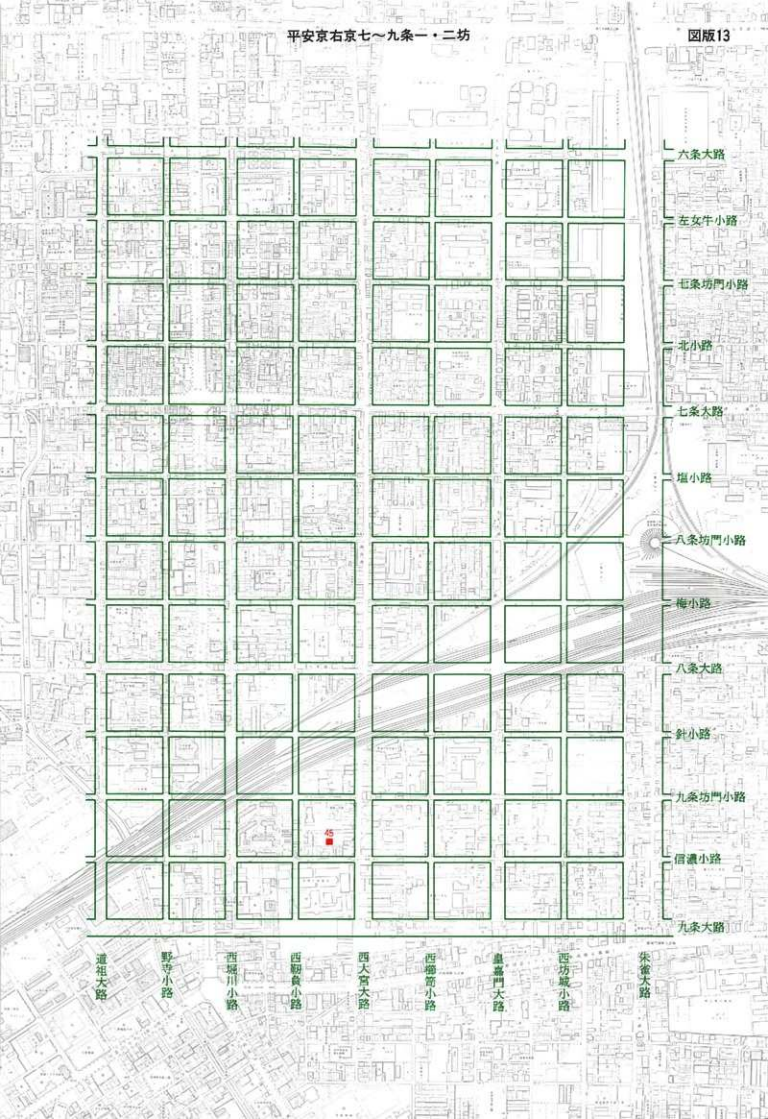
図版12

平安京右京七～九条三・四坊

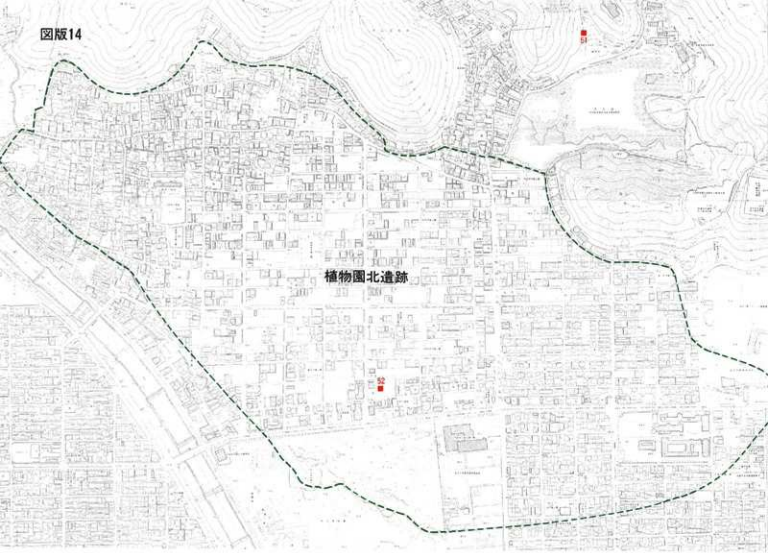


平安京右京七～九条一・二坊

図版13



図版14



図版15

白河街区跡

岡崎遺跡

図版16

六波羅政庁跡

禅林寺旧境内
南禅寺境内
（史跡予定地）
史跡琵琶湖疏水
日向大神宮
文化財環境保全地区

嵯峨七ッ塚古墳群

一ノ井遺跡
和泉式部町遺跡

西野町遺跡

史跡特別名勝天龍寺

図版17

伏見城跡

北野遺跡

北野廃寺跡

仲野親王陵古墳

上ノ段町遺跡

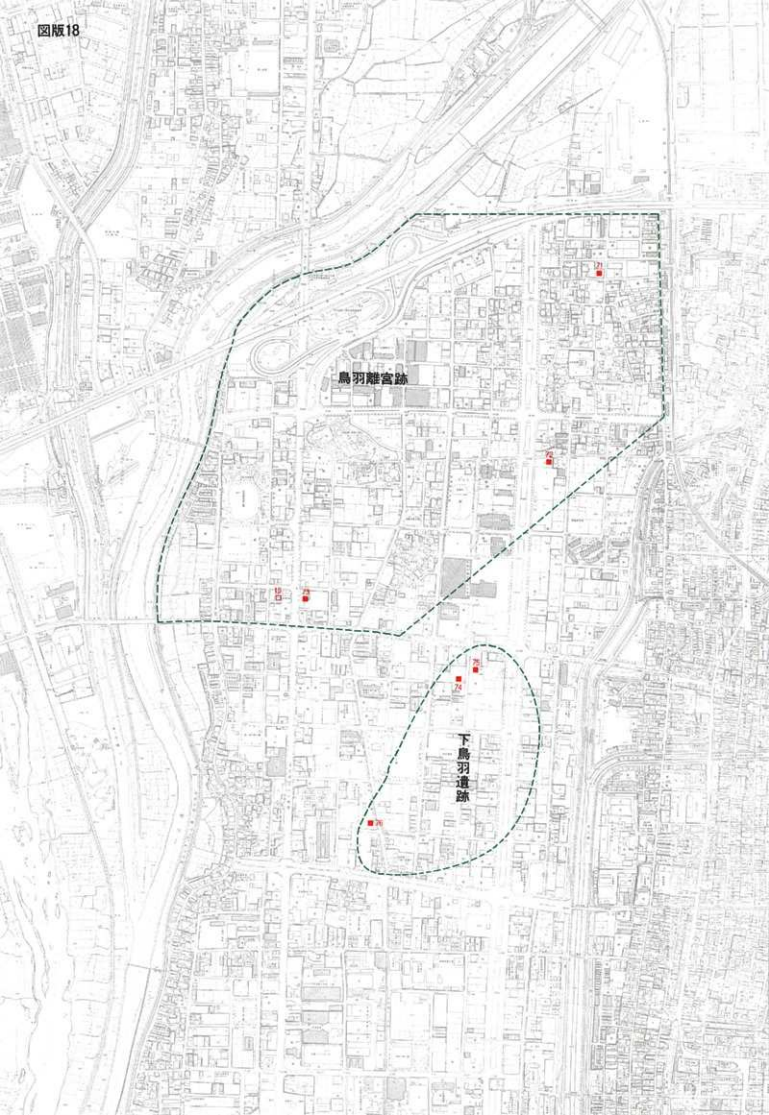
御所ノ内町遺跡

上久世遺跡

中久世遺跡

大藪遺跡

図版18



長岡京跡
羽束師志水町遺跡

京都市内遺跡試掘調査概報

平成10年度

発行日　平成11年3月31日
発　行　京都市文化市民局
編　集　京都市埋蔵文化財調査センター
住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
TEL.（075）441-5261
印　刷　株式会社エッグズ　TEL.（075）595-0241